
転生して目指すはサポート役

星皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して目指すはサポート役

【Zコード】

Z3887BA

【作者名】

星皇

【あらすじ】

神にその能力を欲しきられ友人とともに殺された。

目の前に現れたのは最高神。

もらつた力で目指せ脇役。

オリ主を目指す友人を助けるぜ。

友人たち以外にも転生者を出すつもりでいますが、あくまでもつも
りです。

第〇話（前書き）

毎日更新を目指しますが、なにぶん作者は学生です。
ご了承してくれたら、ありがとうございます。

感想など返せないかもしれません、なるべく返してこいつと思
います。

つたない文ですがどうぞよろしくお願ひいたします。

第〇話

気が付いたらあたり一面が白い世界だった。

……ん？ 一次小説のような始まり方だな。

確か俺は仲間とキャンプで・・・・・・馬鹿みたいに騒いで寝たはずだ。

「・・・これ夢か」

「いや残念ながら夢ではない」

「！？ 誰だ！」

田の前にはかなり筋肉質の男がいた。

髪は白、きれいな白、なにも染まらない色だ。

「わしは神
だ」

「？ （なんだ聞き取れなかつたぞ）」

「おお、すまんな。ヌシらのような者たちでは理解できぬ言葉じゃつたか。

そうじやなヌシらの世界の言葉であらわすと『ゼウス』『オーネイン』といったところかの。」

「神様なんですか？ これは夢じゃないんですね」

「意外と順応が早いの。死ぬ直前を思い出したか？」

「それはまだわからない」

「ほう。ならなぜそう思つ

「俺の直感はよく当たるんです」

「さすがじゃな。それはなはるか昔にヌシの先祖にわが眷属が暇つ
ぶしに与えたものじゃ

『さつと500年前かのう。まあいつかヌシのような者に発現する
よにしてあつたものじゃが』

そつか神がこの直感を本物といつならそうなんだろう。
そして直感は俺に告げてる。

この神は本物だと。

「話がそれたな。本題に入らう、ヌシらの死因は我々にある」

「どうこうことだ? 一次小説だと結構『普通に死んだが抽選で・・・

』とか『お前は異端だつたから』

『本来死ぬはずの人間を助けてしまつたから』ともあるだろ』

「いや、それ以外にもわしらと同じ理由もあつたはずじゃろ』

この神は意外と人間の生活を

「のぞいてあるよ」

!/?心をよまれた。 まあ神だから仕方ないか。

「神じゃからな。まあそれでの一部の神がわし等上位の神に反乱したのじゃ。」

それでヌシの直感を手に入れるためにヌシ等を殺し手に入れようとしたりやが、
ヌシ等を殺したあとすぐわし等に見つかってのひ、すぐに鎮圧した
ところわけじや」

「やうなのか。ん? ヌシ等?」

「やうじやあやつ等はヌシのキャンプの日に決行した。
ヌシの友人を巻き込んでのひ」

・・・俺を殺すためにみんな・・・殺したのか?

「・・・俺のせいでみんなは殺されたのか?」

「ヌシのせいではあるまい。責任は神にある」

「でも、夢のある奴だつていた。それなのに俺のせいで叶えられないとんだる」

涙がこぼれてきた。畜生、畜生。

「畜生が!」

「やう、自分を責めるでない。アフターサービスをしつかりするから安心せい」

「アフターサービス?」

「アリジヤ 転生せしやる」

「転生？あれか？一次元の世界にとかのあれか？ダメじゃないのか？」

「アリジヤするな。わしは最高神じやが。なんでもできるが。安心せし」

「本物じこのか？」

「ああ、と云つても転生する世界は限りなくその物語の世界に近い世界じや」

そつかなりありなるべく争いのなれりつな世界がいいかな。

「ちよつと待て。ヌシ一人で決めぬじともなかりが。ヌシと一緒にここに来た者たちと決めるがよい」

神は指を鳴らした。

「あれ、じこじこ？」

「俺は確かキャンプしてたよな」

「うへん。もう食べられないよ」

「やんつたかのう」

現れたそいつらは一緒にキャンプしていた幼馴染だった。

「あ、『蓮』『じる』？私たち自分たちの寝床で寝てたはずだよね？」

「『葵』『じる』はなんとこつか」

「いや、蓮。俺には分かったぞ」こは天国であつて天国ではない世界だな？」

そして俺たちは神によつて間違つて殺され、転生させられるんだろう？」

驚いたさすが『幸也』ヲタクオブザヲタクとよばれてなかつたな。神様啞然としてるぞ。

「ヌシの友人はす』いのう。神以外にも心が読めよつとは」

神様違うんです。」いつ転生ものの一次小説大好きなだけなんです。

「ううん。あれ、蓮君。もう朝なのかな？すく眩しいね」

「『優奈』実はな」

みんなに説明する。幸也がなんか説明終わると震えだした。

「転生きたああああ！－！なんだこの世界に行くんだ？特典はいくつつけられる？」

「俺はオリ主になるぞお！－！」

・・・こいつ馬鹿だつたな。

「そつか死んじゃつたんだね？」

「・・・葵」

「家族に謝りたかったな」

葵は大家族の三女だったかあの家族とももう会えないんだもんな。

「お父さんもお母さんもきつと悲しんでるよね。」「じめぐ。」「ううん。蓮のせいじゃないよ。蓮の直感に助けてもらつた」とだつて何回もあつたんだから

葵の言葉にまた泣きそうになる。

「ややしきね葵」

優奈はそつ言つて葵を撫でている。

「優奈はいいのか？」

「大丈夫家族とは仲悪かったから。仲直りできないのはちょっとこのひのこつだけね」

『パンパン』手が鳴った。

「さて互いの現状が分かつたところで、まず転生先を決めようかのう」

神が本題に入った。

はいはい、と幸也が手を挙げる。

「リリカルなのはの世界にしようぜ」

リリカルなのは？確かに小学三年生だったか四年生だったかの少女が魔法少女になるって話だよな。

「その世界は安全なのか？」

俺が気にしているのは安全性の三文字
戦争に駆り出されるのは止めんだからな平和に過ごしたい。

「いやな、裏の世界に手を出さなければ結構大丈夫な世界だぜ」

魔法は裏の世界が基本なんじゃないのか？

Fateとかそうだったはずだろ。よく知らんが。

「別にいいんじゃない？あたしあのアニメ見たことあるけど。幸也の言った通り
裏に手を出さなければかなり安全だったはずだよ。つる覚えだけど」

葵見たことあるのか。アニメは小学校四年生ぐらいまでしか見てなかつたな。

ずっと小説とマンガ読んでたし。ビッチかといつと原作はだつた。

「一人がそういうなら俺は別にいいんだが、優奈はいいのか？」

優奈はアニメとか見ないからこの手の会話にはついてこれなぞそうだけど。

「うん。わたしはアニメとか見たことないし。一人に任せると」

「ならリリカルなのはの世界だ」

「どうでもいいが幸也。テンショノ高すぎだろ。
そんなに転生がうれしいか。家族はつてあいつ一人暮らしだったな。
親父とケンカして家出だっけ？」

「わうか、では俗にいう『特典』を決めようかの？」

「俺は身体能力が真祖の吸血鬼並みで魔力値がSSSDで
『王の財宝』。中には宝具全種で投影魔術もつけてくれ
おいかなり強くないか。

「他にはないのか？」

「神様まだあげるのか。これ以上なにをあげるんだ？」

「こなんもんで別にいいだろ欲張りすぎな気もするし」

やめたか。幸也にしては意外と謙虚だな。裏があるのか？
そう思つた俺は別に悪くないだろ？。きっと

「あたしが次言つていい？」

「葵君かい？」

葵は何を言つんだ？戦うのか守るのか。

「あたしは結界と長距離転移を可能にして欲しい。それ以外は別に
いらないよ。

強すぎる力を持つと不幸になるかも知れないから」「

なんかマンガっぽい」と言つたぞ。

「私は回復に特化した能力が欲しいです」

優奈は回復か医者になりたいって言つてたもんな。

「欲がないの。一人を除いて。さて又シはどつするのじや?」

俺の番か。さてどつしたものかな。

「そのリリカルなのはの世界には戦闘があるんだよな?」

「そりだぜ。非殺傷設定魔法とか使つたりするけどな

「非殺傷? 魔法を殺さないよにするのか便利だな。」

「ふむ、なら俺の部屋にあるライトノベルやマンガの知識をすべて
くれ」

「いいのか? 戦闘向きではないぞ?」

「戦闘系は全部幸也(馬鹿)に任せらるからな。バックアップだな」

「蓮、今バカつて言つたよな」

馬鹿が何か言つているが別にいいだろ?」

「オリ主目指すんだろ下手に俺がいたらお前の夢が潰えるかもしだれ

ないだる

幸也はなつとした顔で

「すまん蓮さすが知将だな。そこまで考えていたなんて」

(相変わらず蓮は幸也の扱いがつまこね)

(そうだね幸也は結局蓮の手の平で踊っているのにね)

あ、そうだ。

「俺たちの生活はじうなるんだ?」

「ヌシ等の生活はもう決めてある安心せ。少しいうて不自由でも構わんじやろ」

そつかこいつらと離ればなれば嫌だしな。

「原作ブレイクしてもいいのか?」

幸也は本当にオリ主になるつもりか。

「ああ、さつきも言つたが原作に限りなく近い世界の一いつぢからな。

世界の修正力なんてものは働きはせんよ

よじよじして、と息巻いてやがる。

「さて、質問は終わらかのう。なら頑張つてくれのじや

俺たちの後ろに扉が現れる。

「ヌシ等の人生に幸あれ

「行くか

みんなにこうこうと返事が返ってくる

「おう

「うん」

俺たちは光に包まれた。

第〇話（後書き）

一応他の転生者を出すつもりではあります、あくまでつもりです。
やつぱり銀髪オッドアイとか見てみたいですね。

第1話 ～状況確認と能力を使つために～その1（前書き）

今回は前回と違つて短めです。

第1話　～状況確認と能力を使つために～

（蓮 side ）

眩しい光を浴びて目を開けると、そこは供部屋だった。
ぬいぐるみが二つもある。少なべとも自分の部屋にはなかつたはずだ。

「うーんまだ？」

（蓮よ聞こえておるか？）

神様の声が頭に響く。

「神様か？」

（ヌシ等の今の情報を教えておこうかと思つてのう。）

「助か……ん？ 声高くなないか？」

（ヌシは現在肉体年齢が4歳ほどじゅかりのう。原作は5年後じや。それまでに能力を使いこなすところじゅう）

「やうか。で、まだ？」

（おおうと。やがてやつたな。ヌシ等は孤児院に入つてゐるうりになつておる。これまでの記憶を脳に焼き付けておこうかのう）

「つ痛」

頭に割れるような痛みが走った。
正直一度と味わいたくない。

(ヌシのだけ記憶を入れるのを忘れとつた。他のものは寝ている間にいれおいたぞ)

神様！めちゃくちゃ痛かつたぞ。

(ヌシの能力はそれだけだと原作が始まるとまで使えるからなのう。これを使つとよい)

田の前に銀色の球体が落ちてきた。

「なんだこれは？」

(その中に必要なものが入つてある。時間の流れが違うからのう。
じゅが老化はせんよつとしてある。)

あれか・・・じゅ都合主義、テンプレつてやつか。ありがたいけど。

「そつそく使ってみるよ

(『わうじゅな。起動方法は『ルート・イン』じゅ)

「『ルート・イン』！」

風景が変わる。研究室のようなところに入る。

(端末に触れ。田の前の画面に手をあてるので)

「これか?

手をあててみる。

『マスターを承認します。』

無機質な女性の声が聞こえる。

『マスターの名前を入力してください』

「高坂 こうさか 蓮」

『承認しました。よろしくお願いします、マスター蓮。次に私の名前を入力してください』

「この日の名前か? A-Hって感じだから

「よし、お前の名前は『アイ』だ」

『了解しました、マスター蓮。』

『(ここから出るのは『ルート・アウト』で出られる)

(『ルート・アウト』)

まだいたのか。いや見てたのか。ほんとに助かるな。

「『ルート・アウト』」

風景がまた変わった。

田の前には葵の顔がドアップで現れた。

「 / / / 葵。近いぞ」

「アーネン」

真っ赤になっちゃって、俺もだけど。

「つてか昔の葵そのままだな?」

「蓮もそんな感じだよ」

お互い4歳児になつちまつたからな。

「で、どうした？何か用があるんじやないのか？」

「何つて、顔見せだよ。お互いどうなってるのか知りたいし
本当に離ればなれになつてないか気になつて」

「そつか優奈と幸也もいたのか？」

「うん。みんな同じ家だね」

孤児院だつたな。設定だと俺たちは同じ日に捨てられて、この院長先生に拾われたのか。

「俺たち以外に孤児はいないのか？」

「結構前に一番上が出ていったらしいよ。記憶によると

俺たち4人と院長先生か物語にかかわってた。

「それでね。ご飯だよ」

みんな待ってるよ。と葵がせかす。

「すぐ行くよ」

そうして新しい人生が始まる。

（蓮 side out）

第1話 ～状況確認と能力を使うために～その1（後書き）

次回も能力を使うために・・・です

原作まではもう少しかかるかな。

第2話 ↗ 能力把握 ↗ その2（前書き）

今回は「都合主義満載」です。

・・・案外それほどでもないかも。

第2話 ↗ 能力把握 ↗ その2

↳ 蓮 side ↳

朝食を終えみんなで俺の部屋に集まる。

「さて状況確認。するから俺につかまつて」

「ん? なんで蓮につかまるんだ?」

「神様に研究室をもらつたからそこでしようつと思ひ。能力もそこで使うといいと思ひよ」

「いいもんもらつてんだな」

そつ言つてみんなが俺につかまる。

「コホン。では、『ルート・イン』ー。」

↳ 蓮 side out ↳

↳ 幸也 side ↳

蓮がキーワードを言つと風景が変わった。
研究室・・・か?

「神様によるといこの世界では外と時間の流れが違うらしい」

おま・・それネギまじゅねえか

「アイ聞こえてるんだろ?」

「アイ?なんだそれは?」

「蓮。アイって何?」

葵も聞いてくる。優奈も不思議そうだ。

「アイはこの世界の管理人みたいなものだ」

『お呼びでしょうか、マスター蓮』

おお。インテリジェントデバイスのAIみたいなもんか。
葵も納得がいったようだ。見てたんだっけか?
優奈は普通に驚いてるみたいだけど。

「おお。アイちゃんは人工頭脳なのかな?」

天才か!?優奈はアニメとか見ないはずなのにもう理解してるので?

『その通りです。』

「それで、訓練室はあるか?なるべく頑丈なやつ」

『はい、ここから転送しますがよろしいですか?』

「ああ、頼む」

かしこまりました、トイが言つ。

足元から魔法陣みたいなものが現れ光が俺たちを包む。

幸也 side out

葵 side

光に包まれたと思ったら今度は草原にいた。幸也は水を得た魚みたいに生き生きしてる。

「せつそく能力使おうぜ」

私は転移系だからどうするんだろう？
思い描けばいいのかな？

「じゃあ俺から行くぜ。『トレースオン』……」

幸也の手に剣が現れた。

・・・いやフォーケか。

「へたれ」

ぐさー！擬音語が聞こえてくるみたいだ。
つい声に出ちやつたみたい。

「ち・・違うんだちょっとためしに」「失敗するかもしないから簡単のをだしたんだよな」
違うんだああああああ

幸也が走ってどこかに行つてしまつ。

相変わらず蓮は幸也いじりがつまい。

「やりすきじゃないの？蓮」

優奈が心配して言つが説得力がないちょっとにやけてるよ。

「幸也だからな。あと6分でケロッと戻つてくれるだろ」

リアルな数字だ。ちなみに蓮がこいつ言つと外れたことがない。

「さて優奈の能力は今発動できないが、葵。お前ならできるだろ」

うつむ。どうやってやるのかな？

「神様にやり方のメモもらつたからこれ見ろよ」

そんなのあるんだつたら早く見せてよ。
すまん、すまん、と蓮は言つが絶対に悪いと思つてない。
そういう顔だ。とにかくメモ見てみるかな。

「葵 side out 」

「蓮 said e 」

あれから6分で幸也が戻ってきた。

優奈の能力か。幸也と組手でもやるか？

「優奈の能力は願えばいいらしい」

「願う？」

「そう。 人に元気になつてほしいうて願うだけ。
本気で思はないといけないけど」

「意外と簡単だね。 もつと難しいと思った」

「回復魔法つてそんなもんじやないのか？ 小説やゲームだと高等技術にあたるはずだけど」

「回復つてやっぱり願いだと思つんだ」

「けどまだ使うことないよね。 誰もけがしていないし」

「痛いのはやだけど」

「幸也、 フォーク貸して」

「ん？ いいぞ何に使うんだ？」

フォークを受け取つてそのまま自分の掌におもいつきり突き刺す
ザシュー。 いやな音が響く。

「つー」

「めちゃくちゃ痛い。」

「ーー何してゐのーー？」

優奈はかなりびっくりしてゐが
これも優奈の能力を見るためだ。

「 ゆづ・・な、 能力使つて治してくれ」

ちよつと躊躇したようだがすぐ「 祈るよつて手をくんで、

「 おねがい治つてー」

俺の手に温かい光が溢れたと思つと傷口が完全にふさがつた。

「 ありがと、 優奈」

優奈が泣きそうな顔をしていたので頭を撫でてやる。

「 あーーーー

「 『 めんな、 優奈の能力を発動させてコツを掴ませてやりたかったんだ』

ふう結構痛かつたが回復の瞬間はかなり気持ちよかつたな。
これ、 怪我がなくても体全体をリフレッシュできるんじやないか？

「 馬鹿野郎が、 心配させやがつて

幸也にも悪いことをしたな。

幸也の能力で傷つけたんだから。

「 まあ説教は後ろの方にまかせるけどな

死ぬなよ、 と幸也が田で言つてくる。

振り向くと黒いオーラを出した般若いや生ぬるいな直感が告げてる。
あの神様を超えていると。

この日また優奈の能力の世話をなつた。

{ 蓮 side out }

第2話 ↗ 能力把握 ↗ その2（後書き）

次回はそれから少し経たせます。

神を超えた葵の威圧

その力は魔王か夜叉かそれとも

第3話　～主人公との出会い、いざ翠屋へ～（前書き）

原作まであと少しにさしかかるつかな

第3話 ↗主人公との出会い、いざ翠屋へ

「蓮 side」

転生して1年が経った。まあ充実はしていた。
この体はまだ5歳児遠くへ行こうなんて思えない。
知識を使ってアイとこつそりデバイスを作っていた。
原作になつたら幸也に渡そうと思う。
デバイスなしで魔法を使つたら。きっと実験動物だ。
そうならないといいな。

そうそう、翠屋というところに行つてみた葵と優奈が公園に行くと
高町なのはどういう女の子が一人でさびしそうにしてたから遊んだ。
そしたら翠屋に招待されたからつて、幸也はあのイベントかあとう
るさかつたが。

とこつわけで俺たちは現在翠屋の目の前にいる。

「「」が主人公の家か?」

「「」が魔窟か」

幸也お前かなり失礼なことを言つてるぞ。

「入ひつか」

優奈は甘いものが大好きだからな

「いいか忘れるなよ俺たちは5歳児なんだからな」

店に入ると女性が出てきた、かなり若い。バイトさんかな？

「こ、ひ、しゃ、います。4名様なのかな？」

こんな子供にも敬語を使うのか。さすが従業員尊敬する。葵が代表して言つ。

「私、向田《ひゅうが》葵つてこります。なのはちゃんこますか？」

店員さんが驚いた顔をする。

「あなたが葵ちゃんね。なのはから聞いているわ。

私は高町桃子。なのはのお母さんよ」

お母さん！？若すぎだろ。

「なのはちゃんのお母さんでしたか。私は黒羽《くろばね》優奈です。

葵は前世と同じ向田の苗字だ。会わせるとヒマワリなんだよね。優奈も前世と同じ苗字なんだけど、読み方が違つた。くろばねだったのだが。

「後の男の子は・・・」

そうこうして俺と幸也を見る。

「俺は井口幸也です」

幸也は前世と全く違つた。前世は佐藤だつたな。

「僕は高坂蓮です」

「俺は一応使い分けている。
やつぱみ子供のうちから俺はダメだと黙つんだ。」

「わい。 なのはを今呼ぶから、カウンター席で待つてね」

そつこつて桃子さんは店の奥に行ってしまった。
しづらしくして、なのはちゃんがやつてきた。

「いめんね。 おまたせ」

けつじうかわいいな。前世の田線で見ると上の上つてこうだり、
幸也な。

「あおこちゃん、ゆうなちゃん。そつちのふたりは?」

なのはちゃんが俺たち一人を見て笑ひ。
俺たちも自己紹介をした。
友達が増えるのがうれしいんだり。

「うん。うん。れんくんにいっやくんだね。よろしく」

「ケーキ食べに来たんだよ」

優奈。もう我慢できないのか。

「おかあさん、おいしいケーキみんなにだしてね?」

なのはちやんも張り切つてゐる

「はいはい」

桃子さんもなのはちやんに友達ができる、楽しそうにしてくれてうれしいんだろう。

幸也が言うにはこの頃なのはちゃんのお父さんが事故で入院して一人ぼっち遊んでいたんだが、葵や優奈と出会つて、さみしいことを家族に打ち明けてくれたんだろう。

幸也がなのはを攻略するためにあいつらより先に声をかけるつもりだつたようだが。

邪心はだめだつたようだな。

（桃子 side out）

（蓮 side out）

今日はなのはの友達が店に来るつて嬉しそうに言つていた。士郎さんが事故で入院してから美由紀も恭也もなのはにかまつていられず

さびしい思いをさせてしまった。

あの日なのはが決意したような田で私と美由紀に言つたことはまだ頭の中に残つてゐる。

『さみしこよ。 もつひとつはいやだよ。』

その瞬間私たちには抱き着いていた。なのはにさびしい思いをさせてはいけない士郎さんが戻つてくるまでこの店を守つてなのはと一緒に笑顔ででむかえるから。

}

桃
子

s
i
d
e

o
u
t

}

第3話　～主人公との出会い、いざ翠屋へ～（後書き）

次回は閑話

闇話 ～なのはのやの口～（前編や）

なのよと燐、優奈の出合つた日です

わくわくせあねこひやんとむづなひやんがおみせにあらわれたひなの。
おとひやんだけがおしてにゅうこんして、おかあさんはおみせがい
そがしくなつて、

おにこひや こねこねこかおをしたかぞくをまわるんだひにひつ
たの。

おねえひやんもおかあさんのひつだいこやがしこんだつて。
ひとりになつひやつた。すくべれみしかつたの。
でもおみしこつてこひやつたらめこわくかけひやつかりこわない
の。

でも公園で遊んでいたらなみだがでてきたりつでなこてこたの

「ハ、ひぐり、れあしこみ」

「びひじて泣こてこるの~」

おんなのじがふたりじうひせぎひてきました。

あわててなみだをふるひとくがとほりなかつたの。

「あれ~とほりなこみ」

おんなのじのひがふとつがわたしのあたまをなでてくれたの。

「あ~」「あ~」

「泣きたい時に泣ね泣こてもここんだよ」

わたしがやれをきこたときおもひつかるのをやめた

「ハ、うわーん」

おおいえでないた。よしよしつになでてくれた。
もつらとりのこもねでてくれた。
わたしがじじょづをはなすと

「おぬきにまつてここへ自分の本物の気持ちを」

「でも……」

もしかしたらわがままなじつをおじられるかも。

「そんなことないよおつと大丈夫。だからね」

おんなのじがウインクする。

「友達にならひよ、私は優奈だよ」

「私は葵よ」

ともだちができたれもふたりいつぺん」。

「あなたのお名前は？」

ゆうながくさがきこしてくる。

「わ、わたしはなのは。たかまちなのは」

「なのせりやんだね。今日正式にから黙黙おだいの公園で遊ぼ
うね」

わたしあとひもれしくなつた。
またあしたもあるべる。あらべる。

「じゅあねなのせりやん。またあした」

「ひさ。またあした、ゆひなちゃん、あおこりやん」

やうこいつわたしあいえにかえつたの。

おひにかえるとおかあさんとおねえちゃんがいたの。
わたしあこいつへじしたの。

「おかあわく」

「なこへなのせ。」

なみだがでてく。

「わあこよ。ゆひひとせだよ」

おかあれさせわたしだきだしきてくれた。
おねえちゃんもだきしきてくれたの。

「うふふ。うふふ。」

おかあせとおねえちゃんはないてあやまつてくれたの。
とつこのうねしここひただつたの。

闇話 ～なのはのやの口～（後編）

原作まであと少しぱです。

第4話 ～小学校生活と波乱の予感～（前書き）

結果出したよ。

複数大好きだからね

第4話 ～小学校生活と波乱の予感～

（蓮 side ）

「人生2度目の小学校か」

小学校1年生になった。なつてしまつた。

「子供、りじく振舞うのってす、りく難しいんだよね」

「はあ」

葵と揃つてため息を吐く。

今日は入学式。入学式だくどいようだが何度も言おう。

人生2度目の小学校1年生の入学式。

「精神は肉体に引っ張られる？だつたか優奈はかなり順応早かつたもんな」

「そうだね。幸也も結構それっぽかったもん」

まあどうにでもなるか子供のころの印象が『大人びてる』てたつていうのはよくあることだしな。

「なんとかなるよね？」

「まあ問題はないんじゃないかな？テストだって楽だろ？」「ひどい点数なら笑つてやる」

安心した。

教室に向かうとなのはちちゃんがいた。
優奈と話している。

「おはよー。なのは

俺は声をかける。前にちちゃん付けがしつかりこす、呼び捨てにした。
なのはも気にしていない。葵はまだちゃん付けだが。

「おはよー。蓮君、葵けやん」

「おはよー。なのはちやん

葵も返す。

「今日、幸也くそじつたの?」

「え~と、幸也くそじつたの?」

そう珍しことに幸也は風邪を引いた。

初だそうだ。吸血鬼並の身体能力でも吸血鬼ではないからなのだろうか。

「もうなんだ。大丈夫かな?」

幸也はなのはを攻略するといって、かなり優しく接してたからな。
なのはも『優しい人』と思ってくれているだろう。
そもそも先生きもうだな。

「あ、先生来たみたい」

優奈が確認する。さすが直感これはテストの山もあるからな。
重宝してゐる。さて席に着きますか。

「蓮 side out」

「なのは side」

入学して早数日クラスのみんなと仲良くなりました。
何人か話しかけてない人もいるけど。

・・・あれ?なんか教室がさわがしいな?

「ねえ、返してよ!」

えつと確かにちゃんとバーニングスさん

「お願いだからかえしてよ」

私はどうさにすずかちゃんとバーニングスさんの間に入つて、
パシッソ!! バーニングスさんの頬をたたいていた。

「痛い?でも大事なものをとられちゃつた人の心はもつともつと痛
いんだよ」

「なにするのよ!」

バーニングスさんと組み合つ

周りの子も驚いてゐるがそれどころではない。

「やめてーーー！」

すずかちちゃんの大声で私たちも止まつてしまつ。

「やつだよ女の子が取つ組み合いでなんて」

優奈ちやんも葵ちやんも一緒に止めてくれる。

「い」みんなさー

バーングスさんも謝つてくれる。

「私も！」みんなさー

「はー、これ」

バーングスさんがすずかちちゃんにヘアバンドを返してあげる。
優しい子なんだよね。

「本当にみんなさー

「返してくれたから、別にいいよ

すずかちちゃんも優しい子だ。

「仲直りの握手しなわー

優奈ちゃんがそつこつ

バーニングスさんが驚いた顔をしているが、手を出してくれる。

「私は高町なのは」

「あ・・・アリサ・バーニングスよ」

仲直りしたから今日から友達なの。

「よろしくね。アリサちゃん」

その日はすずかちゃんと仲良くなれたの。

「なのは side out」

「蓮 side」

なのはが何かやらかしたらしい学校に着くとなのはが、金髪の子、確かアリサ・バーニングスだったかと握手してた。何があった、そしてなぜ幸也は残念そうにしている。

「幸也何があつた?」

「蓮。今日はなのはとアリサ、すずかの親友になるきっかけができる日だつたんだ」

「うかよかつたじやないかなのは。」

「親友と呼べる人なんてすぐないだろ?」

「葵達と出会つた時なんてさ、友達がほしかつたんだろ。」

「はーい。皆さん席に着いてください。今日は転校生を紹介します」

転校生？入学してまだ数日だぞ変じゃないか？

「では、アルトリア・ジークフリート君入ってきてください」

はい、と凛とした声が響く。

そいつが教室に入ってきた。

俺の隣は幸也だがそつちを見ると驚いた顔をしている。
そもそもどうだろ？ 銀髪。まあそれは外人っぽいからまだいいだろ
う。

オッドアイ、赤と青これは極め付けだ。

直感に頼らなくともわかる、こいつ転生者だ。

「アルトリア・ジークフリート。アーサーってよんぐれ」

にこりと笑顔を見せる、ついでに歯が白い。

よく見ると何人かの女子がときめいているようだ。

「これは・・・」「コボだとー？」

幸也がうろたえている。

この反応を見ると笑顔を見せるといひよりときめくよひだ。

魅了《チャーム》つてやつか。

こいつが幸也の好敵手だな。

（蓮 side out）

第4話 ～小学校生活と波乱の予感～（後書き）

「」の外休み中に出せると「」まで出でていひ思こます

第5話 ～原作突入までのカウントダウン～（前書き）

今回はバス

第5話 ～原作突入までのカウントダウン～

（蓮 side ）

原作開始まであと数日といったところか
三年生になりなのはもすずかやアリサと一段と仲良くなつた。
俺たちもすずかやアリサと仲良くなつた。
今日は翠屋にお邪魔している。

「にしても、あんた達ほんとアルトリアに嫌われてるよね」

そうなのはやすずか、アリサと仲良くなつてゐる俺や幸也をとにかく
毛嫌いしている。

「こりなよ。かなりまいつてるんだ」

幸也はあいつとライバル関係だからわかる。
だが、俺はもう露骨だ。常に本を読んでいるからなのか、あいつは
邪魔ばかりしてくる。

俺の本を傷つけないだけまだましか。

「僕はケンカする氣ないんだけれどね、しつこいよ」

ふづ。おっとため息が出ていた。幸せが逃げるな。
相乗じうかでもっとにげるんだろつな。

「一度ガツンとこってやればいいじゃない」

そつは言つがなアリサ、俺はこれでも優等生で通していくんだ。

下手にケンカなんてできない。

「あたしが一回怒鳴るつか？」

葵もそつこつてくれるか。ありがたいな

「ナビ葵もそつこつに好かれてるだろ。逆効果だよ」

さつと『あいつに言えつて言われたんだろ？なんてやつだ俺が天誅下してやる』

なんて言つかもしれない。天誅はないか『根性叩き直してやる』かな。

「頭も撫でよつとしてくるのよー」

幸也曰くナーテポラシヨーロボと同じ効力を發揮する。

2つを同時に使うことで効果が増すらしい。

幸也は選択しなかつたもんな。

好きな子は自分の努力で攻略するらしい。

「まあどうにかなるわ、そのうちは飽かるだろ」

「でもその言葉、アルトリアが来てしばらくしてからも言つてたよ」

「すずか。・・・やついえばなんか言つたことあるよつたな。

「今年で2年目ね」

アリサもそんなこと言わないでくれ、心がえぐられるよつだ。

優奈。食べるのやめてそろそろ会話しようぜ。

何個めだ？もうワンホール食べたんじゃないのか？

その日の夜

『誰か僕の声が聞こえる人、力を貸してください』
脳に響く、念話だ

「そつかついにこの日か、原作のはじまり」

幸也が言っていた。この声はユーノ・スクライア。
ジュエルシードというロストロギアを集めるためにやつてきた魔法
世界の住人

「それでどうするの？」

葵も聞く俺たちは幸也の野望を実現させるためのバックアップだか
らなあ。

「とりあえず、俺が原作に加わる。なにか大問題が起きたらその時
は頼む」

まあ、そんなところだろう。
あ、そうだ。

「幸也。アルトリアがかなり邪魔なよつなら俺も加わる。」

「そうだな、大問題なんてそういう起きないとは思うが。お前も関わるつもりだつたんだろ？」

ばれてたか、でも裏方を貫き通すつもりなのは構わない。

無印では田立つた原作ブレイクはないがフレシアを救ひぐらうだろ
う。

「技術職についたんだ。フレセアぐらに救つてやる。かつこ悪いと
こ見せんなよ」

「ほれ、と例のものをやる。」

「ん? これはまさか。」

「セウテバイス。一応インテリジョントだから、『希望通り女性型
マスター認証して』

「サンキューな。よし、マスター承認、井口幸也
術式は古代ベルカ式、愛称『ラルフ』、正式名称『ランドルフ』」

ちなみに、音声はミクをイメージしてある。

この世界にはボーカロイドがないしな。

『認証しました、マスター。では、バリアジャケットの構想をお決
めください』

「ああ、行くぜランドルフ! セット、アーネープ」

幸也が光に包まれた。

幸也のバリアジャケットは銀と白所に黒を混ぜた、ジャッチメント
コードをつくりだ。

「かつこいいね幸也」

「見違えるよ

葵も優奈も褒めだす。

「どうだ、違和感ないか」

「ああ、かなり気分がいい

よし、試作機も完璧なようだ。

「明日からがんばれよ

「ああ。あの野郎も出張つてくれるだろ? だからな

アルトリアのことか。

俺も戦いたいな、つぶしてやる。
おつと裏方、裏方。

しかし俺の特典も捨てたもんじゃないな。
いろいろできそうだ。

↓ 蓮 side out ↓

第6話 ～原作開始～

「 なのは side 」

今日は変な夢をみてしまった。

不思議だつたなあ。まあ夢だもんね。

昼休みみんなでお弁当を食べていると

今日の授業のお話をしたの。

「 将来かあ、みんなはどうするの？」

「 ひがせお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぽい勉強して、跡を継ぐかな」

アリサちやんは跡を継ぐのかあ。

「 わたしは機械好きだから、工学系で専門職がいいかなって思つてゐるよ。」

すずかちやんは理科系得意だしね。

「 僕はすずかと回じだね、といあえずそいつに専門職に就こうともつてるよ。」

蓮君もすずかちやんとおなじ

「 私は、お医者さんになりたいなあ」

優奈ちゃんはお医者さんか

「俺は未定だな」

幸也くんは・・・まあしかたがない。

「葵ちゃん?」

「私は・・・」

ん?幸也君と同じなのかな?

葵ちゃんは手招をする。私とアリサちゃん、すずかちゃんは耳を広げける。

優奈ちゃんは知っているみたいだ。

「(実は――・・・お嫁さん)」

「ええつ――?」「――

「それは職業じゃなじゅうじやん」

その通りだよすかひちゃん・

「こ、いこの満足できれば」

「誰の?」

「アリサちゃんわかるでしょ?」

優奈ひやんはそうこつて蓮君を見る。

「 「 「ああ」 「 」

納得なの。すげへ優しいもんね。

「 も、そりこつなのはまだつかの?翠屋2代田なんでしょ?」

「うふ。それも将来のヴィジョンの一つではあるんだがど

取柄もないしね。

「 なのは、あんた取柄ないなんて思つてるんじゃないでしょうか?」

うべ。

「 そんなことなによ

「 もひ、ならここによ。そんないと書つてたらおひつたからね」

よかつた声に出さなくて。

それにしてほんとびつじよつかな。

「 なのは side out 」

「 アルトリア side 」

やあ、俺はアーサー転生者だ。

神に面白やうだからといつ理由で殺された。

後悔はしていない。俺は転生前はブサイクつて言われていた。

だが心は違うそう説明しても誰も信じてはくれなかつた。

小学生の護衛をしていたというのにどうして通報されなければならないというのだ。

俺は騎士だぞ。

神のおかげで俺は神になつた。

情報によると神のライバルの神がこの世界に転生者を送つたといつ。それで俺にも力を与えたというわけだ。

魔力はEXランク保持者でもつてデバイスももらつた。

そして投影魔術これは最強だ。

神は転生者に与える能力は3つまでというから、ニコポ、ナデポもなんとかしてもらつた。

ヒロインは全員俺の嫁だぜ。

私立聖祥大学付属小学校に転入という形でやつてきた。

イギリス生まれということ。デバイスを使えばさも俺が英語を言つているように見える。

俺のデバイス『ロン』正式名称『アヴァーロン』は神特製の高性能だ。転入してすぐほかの転生者を見つけた。

原作にいないやつを探せばいいから簡単だつたな。

男が2人に女が2人。女のほうはかなりの美少女だ。

こいつらもおとすか。

にしてもたいしたことないな幸也つてやつは魔力をぶつけてやると毎回反応するが

蓮つてやつは無表情だたいしたことないな、殺氣をぶつけても無表情だ。

こいつらはなのはトリオとかなり仲がいい部類だ。

昨日はユーノの声が聞こえたから今日が原作の日だ。

これでなのはを助けてフェイトをなぐさめ・・・

女転生者もかなりの美少女だからな俺のハーレムに加えてやるか。

幸也も蓮も原作に関わっててくるだらうから。
どっちが各上かはつきりさせてやる。

「アルトリア side out」

「優奈 side」

今日は原作の田らしいみんな怪我がないといいな。

蓮がバツクアップするつていうから大丈夫か。

蓮つてああ見えて面倒見がいいから、幸也を幸せにするために頑張るんだろうな。

私たちが死んでしまったことをまだ自分のせいだと思つていたりするみたいだから。

気にしてないのになあ。

それにしてもアルトリア？だつたつけ彼はよく私を見てくる。特に胸、それから足。これでも一応小学生のからだなんだよ。口リコンなのかな？でも今は彼も子供の体だからいいのかな？

葵もよく見られてるつて言つてたつけ。

むむ、要注意人物なのか。

蓮はあんな雑種氣にするなつて言つてたかな。

放課後になつた。

私は葵となのはちゃん達と一緒に帰る。

蓮と幸也は先に帰つてしまつた。

女の子5人だけで家に帰すだなんて男としてどうかな。

でも後ろのほうでアルトリアが後をつけるようにして歩いている。ちょっと視線が怖い。あの眼は前世で変質者に追われた時以来だ。

「大丈夫？」

葵が心配してくれる。

「大丈夫だよ」

笑顔で返す。

なのはちゃんと達は気づいてないみたいだ。
あの時は葵と一緒に帰つてたんだつけ。
すごく怖かった。

蓮と幸也がすごく怒つてた。

蓮はかなりケンカが強い他校の高校を壊滅させたといつわさもあつた。

幸也もそれなりの強さだったんだよね。

あの時は変質者のせいですごく怖かつたけど、蓮と幸也が合流した時は、

ちょっとだけほんのちょっとだけ同情した。

蓮が離れてしばらくしてから野太い断末魔のよつな声が聞こえた。
警察にかなり怒られてたなあ、やりすぎだって。

今の状況を蓮に連絡したら、彼はひどい目に合わせられるのだろうか？

やめておこう。彼はかなり女子に人気があるみたいだから。

「この道を行くと塾に近道なんだ

「え、 そうなの？」

アリサちゃんがちょっと暗めの道を進める。
散歩とかしたら気持ちいいんだろうな。
しばらく進むとなのはちゃんが立ち止った。

「なのははちやんどうかしたの？」

「今何か聞こえなかつた？」

わたしには何も聞こえなかつた。

ああ、あれか。確かにコーノ君の声が聞こえるってやつか。

私も葵も普段は蓮の造つた

魔道具『幻想殺し《イマジンブレイカー》』というネックレスをかけている。

これのおかげで念話が聞こえないんだろう。

幸也はつけていないがたまにアルトリアが幸也に魔力をぶつけているらしいが、

私たちは一切うけていない。

「何か？」

「うふ、声みたいな」

「別に聞こえないよ」

私も白を切る別に嘘はついてないよだつても「聞こえなかつたもん。

「空耳なんじやないの？」

するとなのはは走り出した

「なのは？」

「なのははちやん？」

しゃりくなのはちゃんが走つてから追いつく
なのはちゃんがフロレットを抱えていた。

「座我してゐのね、早く病院に行かなきゃ」

「獣医さんだよ」

すべに近くの動物病院まで走ってきた。

院長先生は衰弱してゐるって教えてくれた。けつこう座我してたもん
ね。

あ、なのはちゃんの手をなめた。
けどまた、眠ってしまったみたいだ

コーノ君はなのはちゃんが気についてくれたみたいだ。
なのはちゃんを狙つてる人が結構いるからこれを知つたらコーノ君
はきっと火あぶりだ。

なのはちゃん達が塾だからいいでお別れだね。

「コーノ君つて私たちの家で飼うことなきないの?」

あんた何言つてるの?みたいな目で見られた。

「あんた?」「いめんなさい。最後まで言わないで」・・・や

まあ原作ブレイクしきになるよね。

下手したらなのはちゃんが魔法に觸わりがなくなつちゃうもんね。

「なんにしても今日が運命の日だよ」

葵・・・かつこいい。

「 優奈 side out 」

「 なのは side 」

寝る前になつて変な感覚が襲つた

『 聞こえますか？僕の声が聞こえますか？』

昼間の、そして夢の中の声

『 いの声が聞こえるあなた。僕に力を貸してください。』

空耳？いや違う。気になる。

私は動物病院に向かつた。

あのフェレットが病院から出てきた
変な動物がフェレットを追つてる。

そして私は逃げている。

フェレットがしゃべったのには驚いたが、そんな場合じゃない。
このフェレットは私に資質があるって。
魔法の力を貸してほしいって

フェレットは持っていた宝石を私に渡した。

「それを手に、目を閉じて、心を澄ませて、僕の言つとおりに繰り返して」

そしていつおりに呪文を唱える。

「我、使命を受けし者なり「我、使命を受けし者なり」 契約のもと、その力を解き放て「契約のもと、その力を解き放て」 風は空に、星は天に「風は空に、星は天に」 そして不屈の心は「そして不屈の心は」「この胸に。この手に魔法を。レイジングハート、セットアップ！」

『スタンバイレディ』

なのは side out

幸也 side

なのはがセットアップした。

さて出番かな。

それにしてもあの野郎『アルトリア』 来なかつたな。
フェイト側に着くつもりか？

そんなことより今は田の前のことだ。

「なのは……」

「ふえ？ 幸也君？ どうしてここ？」

「民間人か？ しまった結界が」

ユーノのやつは俺のことと民間人と思つてやがるな？

「幸也くん！逃げて！」

化物は好機と見たのか俺のほうに向かってきた。

「安心しろなのは。俺は、大丈夫だ！」

行くぜ。初めての実戦だ。ラルフ頼むぜ。

「ランドルフ……セツ——ト、ア———プ」

『オケーマスター』

バリアジャケットを纏う。

「この世界にも魔導師が？（しかもこの魔力量この子以上！？）

「なのは俺は封印ができない、だから封印を頼む。」

「え、え？えええええー？ねえ封印ってどうやるの？」

「心の中に呪文が浮かびます」

時間稼ぎだが倒すつもりで

「うああ」

強いな原作よりずつと強いこの世界に転生者が現れたことによつて
かわつてしまつたてのか？
だが、

「俺のほうが万倍強えええ！！」

なのはの方も準備ができたみたいだな

「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアル？？？封印」

ふう終わつたな。

さて、どう説明しよう。

＼ 幸也 side out ／

＼ アルトリア side ／

よし。なのはを助けに行くか。
セットアップもしてある

「待つてろよ。なのは」

「そういうわけにはいかない

「誰だ！？」

そいつは俺を見下すように空中に立っていた。

そいつは真っ赤な髪にバイザーで顔を隠している。背は170ほど
ある。

「テメー何もんだ。転生者か！？」

「ん？転生者？何を言っているの？私はマスターの命によりあなた
を足止めさせていただきます。」

転生者じゃないだと。

「だけよ。最強の俺様が相手をすると敵いませんがもだぜ」

「『シャナ』セットアップ」

返答は武装の準備だった。

「行くぜ」

先手必勝

「『ブリッジアクション』……」

フェイトが使う魔法の一つ相手の後ろをとる。

「もうつた。」

全力で振りぬく。

・・・が、むなしく壁を切る。

「なー?」

「見え見えですね」

後ろだとー?

「『断罪』一閃」

俺の覚えているのはここまでだ。

「アルトリア side out 」

「?? side 」

(マスター終わりました)

(ああ、見ていたよ。さすがだね。

まだまだ技の切れがいまいちだがそれは訓練でどうにでもなるだろ

(う)

(このよつなもの『妹』でも何とかなったのではないのですか?)

(ん? 彼女はまだ調整中だよ。それに苦戦するかもしないからね

(相手は苦笑いをしているのだろう。

生まれて間もない彼女でもマスターのことだと少しぐらいわかる。

(つまらなかつたかもしだれないと、我慢してくれ。

今度会つたときはもっと強くなっているかもしないだろ

そう・・だなまだ子どもだったからかあの魔力量十分な素質がある。

(あちらも終わつたみたいだ。戻つてきていいよ

(はい。マスター蓮)

「?? side out 」

第6話 ～原作開始～（後書き）

彼女の設定は後程明かします。

シグナムと戦わせたらたのしそうですね。

第7話 ～原作開始のその夜～（前書き）

今日は昨日またぐじんどん更新がでさませんが、
もう一つ話づくり更新するつもりです。

誤字・脱字があれば報告お願いします。
感想もあると嬉しいです。

第7話 ～原作開始のその夜～

～ 幸也 side ～

一つ目のジコヘルシードを封印し終えて公園に来た。

「幸也君は魔法使いだったの？」

「ああ。まあ、ほかのことはこつが田覚めてからな

そう言つてゴーノに田をやる。

ゴーノはジコヘルシードを封印した安心感がまた眠つてしまつた。

そろそろか起きるか？

「・・・すみません」

「あ、起こしちゃつた？ 怪我、痛くない？」

「あ、怪我は平氣です。もうほとんど治つてこらから

ゴーノはまかれていった包帯をほどいた。

「ほんとだ。怪我の跡がほとんど消えてる」

「助けてくれたおかげで残つた魔力を治療に回せました

「治療魔法か？ 便利だな」

「あなたは？」

「俺は井口幸也。魔導師だ」

「この世界には魔法技術はないはずですが」

「赤ん坊の『ころから』につを持つてたんだと」

そつ言つてブレスレットを見せる。

蓮のくれたデバイスはブレスレット型

「それより自己紹介しないのか？まだ名乗つてもうつてないんだけど？」

「すみません、僕はユーノ・スクライア」

「私は高町なのは、仲良しの友達や家族はなのはつて呼ぶよ

「さてユーノ、あれはいつたい何なんだ？」

知つてはいるがやっぱり知らないふりをする。

「あれはロストロギア『ジュエルシード』僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は手にしたもの願いをかなえる魔法の石なんだけど、力の発現が不安定でさつきみたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加えることもあるし、たまたま拾つてしまつた人や動物が間違つて使用してしまつて

「さつきのは何かの動物が何かの願いを叶えようとしたが、間違つて暴走したと」

「はい」

「にしてもロストロギアがあ、どうしてそんなもんが地球にあるんだ？」

「それは・・・僕のせいなんだ」

ユーノは言い淀んでしまう。

「僕のは故郷で遺跡発掘を仕事をしているんだ。そしてある日古い遺跡からあれを見つけてしまった。」

調査団に依頼して保管してもらつたんだけど、運んでいた時空間船が事故か何らかの人為的災害にあって

21個のジュエルシードこの地球、海鳴市周辺に落ちてしまつたんだ

「何個見つけられたの？」

確か原作だと2つだつたよな

「まだ1つなんだ、油断しちゃつてさつきのやつにやられてそしたらなのはさんに助けてもらつたというわけなんです」

「あと20個か先は長いね」

「1個？俺たちが現れたことで世界が変わつちましたのか？
ユーノがなのはの方に向いて

「それで・・・巻き込んでしまつてごめんなさい」

「別にユーノ君のせいじゃないんじゃないの？事故が悪いんじゃない。」

「それでも発掘した僕に責任がありますから」

「眞面目なんだなユーノは」

「これからは僕ががんばります。あと5日ほどで魔力も回復しますしもう迷惑はかけられません」「それはだめだよ」「え？」

「だつてもう知り合ひやつたし、話も聞いたやつたもの」

「俺も放つておけないな、危険なものなんだつへ..」

「なのはがこんなとこりでやめるはずはないだろ？」

「それに一個でこれなら何か用掛かるんだ？今日のことをなかつたことにして

「これから過ぐすなんてなのはこはできれつもなにからな」

ひどこよ。ヒナのははぬひが

「そんな、でも危険ですよ」

「お家の周辺でこんなことがある気になつちやつ、
それに周りの人にも迷惑になつちやつでしょ？」

「手伝わせりよユーノ」

「お手伝いさせて、私頑張るから」

「うん・・・ありがと」

「幸也君が魔法使いだったなんて」

「『』みんな黙つて、男は秘密があつた方がかつここにいて蓮も言つてたからな」

「蓮君も魔法使いなの？」

「いや、心構えかな。あいつ芸達者だから。それに俺誰にも魔法使いだなんて教えてないし」

蓮たちのことは教えない方がいいだろう。

アルトリアは・・・どうするかな？

今日は来なかつたし、フロイトの側に着くつもりなのか？
そしたら全力で戦えそうだな。

あ、

「やうだなのはこんな時間だけど帰らなくていいのか

絶望した顔してるな

「は、早く帰らなきや。コーノ君はまづうちに来る？まだ教えて惜しい
ことがあるし」

「はいお願ひします。でもいいんですかなんだつたら幸也さんの」

「幸也でいいぞ」

「幸也の家のほうがここなのでは」

家か・・・蓮たちがばれると厄介だな。

「家は・・・駄目だな。一人めちゃくちゃ感のいい奴がいるからばれるぞ」

ユーノはまさかって顔をしてる?動物顔だからよくわからないが。蓮の直感は最高クラスだ田をつむつてドッヂボールの球をよける。なのはも思つところがあるようだ。

「う、うん。蓮君ならばれちゃつかも」

そんなになんですか?ユーノは驚くが無理もない。
追い打ちをかけるか。

「それにあいつはいろんな実験が大好きだからな。ぼりを出したら解剖されるかも」

「わかりましたなのはさんの家に行きます」

よし

「それじゃあ明日からジュエルシードを探しに行ぐぞ」

今日はこれで別れた

家に帰るとみんなに相談した。

「原作と少し変わってるっぽい」

葵は原作を知っている。

これで原作の知識はあまり必要なくなつた。

「アルトリアは？」「ちに着くの？」

「さあな、今日は出でこなかつた。つてことはフロイト側かもな
蓮が足止めしてくれたのかも。
正体ばらしてないだらうな・・・ないか今まで以上の嫌がらせなんて
いやだもんな。どうでもいいんだらうけど。

「蓮は？」

「研究室に閉じこもつてるよ」

あいつは最近何面白いこと見つけたのか知らないが
こそそと準備してるみたいだな？

「明日は神社なのかな？」

「もしかしたら違うかもしけないが、ある程度は同じじゃないか？」

「犬じゃなくて猫とか、それはすずかの家か。

「なんにせよ始まりだ」

「幸也 side out」

「アルトリア side」

気が付くと公園だった。

「俺は確か・・・」

そうあの赤髪の女にやられて・・・
うそだ！！！オリ主であるはずの俺が負けるだなんて
・・・そうだ・・・何か汚い手を使つたんだ
短距離転移とか・・・次は負けねえ。
勝つて俺のものにしてやる。

なのはを助けはしなかつたがフェイトに協力するのもいいな。
あの純粋な子はコロツと落ちるだろう。
待てろよ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ

＼ アルトリア side out ／

＼ ?? ? side ／

（それでマスターあの男を監視していればいいのですね？）

私はマスターと連絡を取る

（そりだね、そして件のロストロギアが暴走した時に邪魔してくれてかまわない）

あんまり近づきたくはないのだが、これも命令だ。

（何かあつたら『妹』のバックアップも付けるよ

） どうか調整が終わつたのか、私の『家族』

(一応君の家はここなんだから戻つてきてね、あとバイクスに何かあれば)

(はい、すぐに戻ります)

(よしよし、今度近づいてから戻つてくるよいつかう時の時は戻つてきてね。

暇なときは自由にしてていいからや)

(はい、交信終了します)

＼ ? ? ? side out ／

＼ 蓮 side ／

現在俺は能力を使ってデバイスを作っている。
葵と優奈の分だ。

幸也のはブレスレットにしたし、ネックレスだと『幻想殺し』とか
ぶるからなあ。

「となると、指輪かイヤリングか」

あ、髪飾りってのもいいな。

「ならせつねく」

アイに材料を持ってきてもらい製作を開始する。

2日かな?俺たちが襲われるしたら、A-s編が狙われるって言つてたな。

「アイ。現実世界は今何時だ？」

『現在1時です』

1時かなら戻つて寝るかな。

いや、学校で寝ればいいのか？

おつと優等生キャラを貫き通さねば。

「じゃあもう戻るから、そのままにしておいて」

とりあえずアルトリアの行動が楽しみだな？

「ちよつと待つてくださいー！」

後ろを振り向く。

そこにいたのは緑色っぽい髪の小柄な子

目は翡翠色、きれいな緑だ

白のワンピースを着ている。

「どうした? リーシュ

目の前のリーシュは怒っているようだ。
ブンスカ、ブンスカ擬音語が聞こえてくる。

見てて和むな。

「お姉さまはびっくりしてこるのでですか？まだ会っていなこのですよ

その」とかやつぱいの子もバックアップに回すか？

「君はまだ生まれたばかりだろう? もう少し待つてくれないか

せめてこの世界の常識を身に付けてからこじてほしい。

「豚野郎の監視なんかにお姉さまを使つだなんて、何様のつもりですか?」

とにかく口が悪い、何をミスつたのだろう。

普通の子にするはずだったのに。

今更性格の変更なんて俺がまるでマジックサイエンティストみたいじゃないか。

「なんにせよ、もう少しで戻つてくれるよ」と言つておいたから

はあ、こんな調子で大丈夫なのかな?
この子リリスしか見てないからなあ。

（蓮 side out）

第8話 ～なのは、一人で戦つて（前書き）

どうも読んでいただき、感謝感激です。

弟がスゲーじゃんって言ってくれるんですがまだまだですね。
毎日更新田指しますがなにぶん体は高校生中身はお子ちゃます。ぐく
眠いんです。

アルトリアの名前に「」指摘いただきました。

アルトリウスが男の名前だそうです。

ま、いいよね。この方が面白そ'だし。

第8話 ～なのは、一人で戦つ～

（蓮 side out）

眠い。結果的にリーシュに付き合わされて1時間しか寝れなかつた。その上葵がなぜか怖い。知らない女の子の匂いがする。なんて言つてきた。お前は犬か。突つ込んだらぼろが出そつたから何も言わない。葵はずつと睨んでくる。優等生を捨ててまで寝ようと思つたが無理だつた。

葵の殺氣は恐ろしい。家に帰つてすぐに寝よう。そう決心するほどだ。

昼休みに入つて幸也がアルトリアに呼び出された。
昨日のことを聞くつもりなんだろ。アリスに負け、邪魔することを糾弾でもするつもりか？
幸也は何も知らないのに。
ま、一応俺も行つておきますか。

（蓮 side out）

（幸也 side ）

アルトリアの馬鹿に呼び出された。
宣戦布告か？まあ別に負けないけどな。
体育館裏のどこの窓からも見えない死角に連れてこられる。
この学校不良とかいないのか。
THE・溜まり場つて空氣出てんだけど。

「おい、昨日の邪魔はてめえの仲間か？」

邪魔があつたのか？

「さあな。俺はなんも知らないぜ」

「まあいい。あの女も倒して俺のもんにしてやるしな」

女？葵か優奈が出てきたのか？

あいつらの能力は戦闘用じゃないはずなのに。

「どうした？なのはは俺のもんにするんだ。モブは引っ込んでな

「モブってお前オリ主にでもなつたてのかよ？」

どんな能力をもらつたんだ？

「俺はオリ主だ。テーマはここで痛い目に遭いな

そういうてやつは手に剣を出す・・・投影・・・か？

「ん？どうした？俺の投影魔法を見てびっくりしたのか？」

あれは『干将・莫耶』てことは・・・かぶつた？

いいのか？それでいいのか？

そう思いつつ俺も干将・莫耶を投影する。

「何ー？ちよ、おま、パクつてんじやねえぞー！」

「お前も投影が能力とはな、完全にかぶつたぞ」

一触即発の空氣だな。あこいつは自分のことオリヰと思つてゐるから絶対攻撃してくるつもりだろ。

「何してるんだ?」

蓮がやつてきた。

(蓮、こいつ俺と同じ能力だった下がつてる)

(そりゃ、幸也。俺は魔法の存在を知らないモブキャララつてことにしておけ)

俺たちはお前つながりでなのは達と友達だつてな

(わかつた)

「蓮! 危ないぞ下がつてろ

「こいつも転生者だろ? なひひひで消してやる

(何言つてやがるーこいつは一般人だー)

(何ー? お前の仲間だろ)

(普通の友達ができるって考えられねえのか?)

「だが、見られたんだ。こひで消す」

「記憶を消す。それでいいだろ?」

蓮は何が何やらといった表情をしている。さすがだな役者になれるぜ。

「わかった。そつきの続きは放課後だ」

逃げんじゃねえぞ。と捨て台詞を残して去っていく。

「まさか転生者とわかれれば殺すつもりとはね」

蓮が呆れている。俺もかなり驚いた、デバイスがあるとはいっても特殊能力はないようなものだ。

バリアジャケットの展開が遅くなれば死に繋がる。

「こじても昨夜はなにを「ストップ」・・・なんだ?」

「その説明は今日の夜な。説明長くなるかもしないし、なのはの手伝いするんだら」

放課後はなのはの手伝いをするのだがかなり気になるぞ。

「そんな顔すんな、夜に説明するからよ」

「ああ、分かった」

あ、チャイム鳴っちゃった。
弁当まだ食つてないぞ。

放課後はなのはと・・・その前にアルトリアの野郎とそつきの続きか

「アルトリアの方は任せろ。お前の所に行かせないよ」としてやる

「なのはなにもばらさないのか？」

「ああ、時が来ればな」

いやおうなくばれるだろ？ そう付け加える。

「さて、教室にもどるか

腹減つたな。あいつのせいでまだ食っていないしな。

俺たちは教室に戻っていた。

幸也 side out 丶

丶アルトリア side 丶

昼休みにパクリと話してからモブに魔力をぶつけているが何の反応もない。

本当に記憶を消したみたいだ。でなければこんなに平然としているはずがねえ。

なのはも驚いた顔でこっちを見ていたので、笑顔でかえす。
途端に目をそらされた。恥ずかしがっちゃってさすが俺の嫁だな。
放課後はパクリをのしてなのはにビッチが守るにふさわしいか見せてやる。

フェイトのことも考えとかないとな傷を一瞬で癒す宝具とかあつたはずだ。

これを使えばフレシアも治せるし。

放課後になつて幸也の後を追う。

あこつなのはと一緒に帰るつもつか。

「幸也を借りていいか?」

なのはに尋ねる。

なのはも俺が魔導師だってことに気が付いただひしお。

幸也の方をちらりと見てから。

「へ、うん。いいよ。私もつこで行つてこいみやね?」

ふふ。力の差を見せてやるぜ。

そして強い俺にははメロメロ。完璧だ。

(どうして魔法が使えるか聞いておかねや)

神社の方へいく。原作だと次はここかな?
頂上までの階段を上ると街が一望できる。
ん?あれは?俺は視力が強化できるからよく見える。
あのバイザー。あの女だ。まっすぐにこいつを見てる。

「「」あんなのはちょっと用事を思い出した

「え?」

「ちよっとここで待つてくれ」

なのはをこんな奴と2人きりにするのは忍びないが、
あいつをさわつとつぶせば済むだけだ。

「ロボ、セットアップ」

『オーライマスター、セットアップ』

バリアジャケットを身に纏う。イメージはセイバーの騎士甲冑。

「行くぜ、待つてろよ。」

『アクセルファインー』

一気に加速してあの女を倒しに行く
すぐ終わらせてやる。

＼ アルトリア side out ／

＼ 幸也 side ／

あの野郎が何か見つけたのか俺となのはをおいてどこに向かっている。

視力が強化されているから奴の行先を見ると赤い髪の女性がいた。
あれが蓮の対策か？変身魔法かなにかか？

「行つちやつたね」

なのはは呆れているような。

俺でもわかる好感度が絶対下がったな。

呼び出しておいてこんな階段を上らせたあげく自分は飛行魔法でど
つかに行く。

あ、でもなのははついて行くって言つたのか。
俺は、まあいか原作ならここが2つ目だ。

「あ、ユーノくん！」

ユーノのやつがやつてきた。

「あ、なのは、幸也いま空を飛んで行ったのつて？」

「新しい魔導師だよ。アルトリアくんつていうの」

「魔導師ですか？ 2人もいるなんて」

「ユーノなんでいるんだ？」

疑問だまだジュエルシードは見つかっていないのに

「ああ、それならなのはが魔導師がいるつていうから一度見ておこうかと」

「そうだな・・・ん？」

「ジュエルシードが発動した？」

「IJの奥です」

奥に犬のような化物がいた。

怖！？ そうだ

「なのはー・今回はお前がやつてみる」

「えー？ 手伝ってくれないの？」

手伝いたいんだけどよ。

「なのははこれからも魔法を使っていくだろ?」

そしたらここいらでレベルアップだ。本当に危なくなつたら俺が助けに入る」

俺が手伝いすぎると将来に管理局のHースのポジションが揺らぐじ
まうかもしれないしな。

「ユーノ結界だ！」

「うん」

「のは大丈夫だ。俺はお前を絶対に守る必ずだ」

笑顔で安心をせようとする

成功はしたようだ。

(あの笑顔いしなあ
よしかんはるぞ!!!)

あちでも結界が張られているみたいだけど、

アルトリアの奴案外強くないのか？
いや、蓮が規格外なだけか。

あいつのトラップは完全に抜け出したと思つても止めがくるからな。チートをもじっても苦戦はするか。

「幸也 side out 」

「なのは side 」

幸也君に言わされて怪物と向き合つ

「レイジングハート・セートアーップー！」

幸也君がこれだけでもいいと言つから言つてみたけど、服装に変化がない

「あれ？ 服装変わつてないよ」

あわててレイジングハートに尋ねる。

『イメージしてください』そうすれば大丈夫です』

イメージか・・・よし

『いきますよ。バリアジャケット』

私の体は光に包まれて、昨日と同じように服装が変わる。

「これで大丈夫だね。次はどうすればいいのかな？」

と言つてる間に怪物が突撃してきた。

「え、ちょっと・・・まっ」

『プロテクション一』

「グオオオオオオーー！」

雄たけびをあげて怪物がはじかれていく

「あ・・・れ？」

「一撃?」

幸也君がすく驚いた顔をしてる。

「はい、なのはー今のひちに封印を」

そうだ封印しなきゃ。

「レイジングハートお願い。リリカルマジカル！ジュエルシードシリアル？？封印！」

ジュエルシードは封印されて怪物は子犬に戻った。

「お疲れ。俺いらなかつたじやん」

「でもまだまだだよ。コーノ君、幸也君もつといふこと教えて」

「うん（僕が教える」とあるかな？」

「あんまり教えるの得意じゃないんだけど」

よし、これからもがんばるぞ。

」なのは side out 』

』アルトリア side 』

あいつを見つけて結界を張るとなほの方も結界が張られたみたいだ。
くそ間に合わなかつたみたいだ。

とりあえず。

『トレースオン同調開始!!』『ガラドボルグ?偽・螺旋剣』

弓を投影して打ち込む。

あたる直前に指を鳴らして。

『ブローカン・ファンタズム壊れた幻想』

大爆発で一気に吹き飛ばす。

「終わったな」

これを喰らつて生きてた奴はいねえ。

バーサーカーにでもなるんだな。

「やつちまつたか? もつたいねえことしちまつたな

いい体だったのに。』

「残念ながらはずれです」

そいつは上にいた。

馬鹿なやつぱり転移使えんのか魔法陣が出てなかつたの。」

「てめえ」

「こきなりなんですか？見かけたら攻撃するのですか？」

「昨日の借りを返しに来たんだよ」

女はため息を吐く

「先に仕掛けたのはそちらですよ？あの時私はデバイスを準備しただけなのですから」

よく見るとデバイスは刀型『レヴァンティン』に似ているがこっち
は黒が主体だ。

「てめえ誰が命令してやがる。幸也か？」

「彼ではいざわしません」

「幸也じゃない？」

じゃあ誰がやつ以外に転生者はいねえはずだ。

「わい、あちひまむ終わるよひですね」

な、もうおわるのか？

俺また出遅れた？こいつはなのは手伝おうとする俺の邪魔をしこ
かたつてのか？
ふざけやがって。

「これで終わらせてやる

「I am the bone of my s

「そんな時間を考えると思つていいのですか？」

な、ふつう詠唱が終わるまで待つだろう。
いない？どこへ？

「終わりです』断罪・一閃』

目の前に現れた炎に俺は焼かれ切られた。

』アルトリア side out 』

』リリス side 』

(い)苦勞様、リリス)

マスターからの通信に入る。

こんな小物放置していくてもいいのでは？

(いえ、マスター。話になりません。詠唱の途中に襲われると考え
ないのでしょうか？)

(彼は単純なんだよ。大技はそれだけ放つのに隙ができるところ
をわかつてはいないんだ)

最後の詠唱は切り札だったのだろうあれを私に放つには不意打ちで

行うしかない。

無駄でしうけどね。

(リーシェが会いたがってる。一回戻つてきてくれないか? 幸也に、みんなにも紹介したい)

(そうですか。わかりました。でも監視はいいのですか? 幸也に説明するよ。

脅威度はかなり低いから安心してってね)

そうですか。マスターの『友人が怪我をされるのは困りますし。

(デバイスの様子も見せてね)

(はい)

私は横に転がつているアルトリアを見て思つ

(眞面目に訓練すればいいのに)

彼は慢心している。力を扱い切れていない。

(これでは今までの監視は杞憂になりそうですね)

＼ リリス side out ／

＼ 幸也 side ／

「来ないね」

なのははやつづぶやいた。

返り討ちにあつたのか？

ならもう待つ必要もないな

「なのは。 もう帰るか

ジユーハルシードを封印しても、つい一時間は経つもう待たなくていい
だわい

「ナビ・・・」

「また明日聞けばいいこれ」

もう夕方だしな。と付け加える

「なのはとこいつはお話しきれて、お土産でもかってこいつか
なつて」

「ここに決まつてゐよ」

「あ、そつだ翠屋によつていいだわいへ、お土産でもかってこいつか
なつて」

俺となのは、コーノは翠屋に向かつて帰つて行つた

（幸也 side out）

第8話 ～なのは、一人で戦つ～（後書き）

？？？は結果リリスです

今度キャラ紹介出しますね。

次回も読んでいただけると嬉しいです

ではでは

第9話 ～報告～（前書き）

誤字・脱字があれば言つてください。

なるべくすぐ直します。

第9話 ～報告～

（蓮 side ）

その日の夜。みんなを研究室に呼ぶ。

幸也も戻ってきたし、しかもケーキまである。『氣の利くやつだ。俺はみんなを見渡して一つ咳払い。

「コホン、では俺が裏方としてやつたことを報告しようがな

「たのむぜ」

「まずは一人を紹介しよう。入っておいで」

扉があいて一人が入ってくる。リリスとリーシュだ。

「紹介する。リリスとリーシュだ」

お互に挨拶を済ます。

「この子たちどうしたの？」

葵が聞いてくる。頬むから田の色を滲さないでくれ。

「どうしたってこうか・・・造った

な、と驚いてくれる。その顔が見たかったんだよ。

「優奈はわからないかもしけないが彼女たちはデバイスだ」

その言葉に幸也も葵もわかつたようだ。

「・・・ゴニゾン『デバイスか』

「その通り。俺と優奈の分な」

「私にはないの?」

「リリスは攻撃特化型でリーシュは補助・防御特化型。
幸也には必要ないようだし、葵は防御が得意だろ?
俺は火力が弱いし、優奈は回復系だから防御面が欲しいかったんだ」

この説明にまあ納得してもらつ。

十分だろ?。

リーシュが近づいてくる。

「私のマスターはある子なの?」

優奈の方を見る

「ああ、頼むぞ」

わかつた。と優奈の方に向かっていく

「私の名前はリーシュ。マスターよろしくね

「えっと・・・私は優奈。よろしくだねリーシュちゃん」

葵と優奈に渡しておかない。

「まず葵。これデバイスな」

船輪を渡す。おお、驚いてる驚いてる。

「指輪？け、結婚？」

ん？最後の方聞き取れなかつたけど。

「そう指輪型元ハイスクーリー聞いてるか?」

指輪。指輪。といつぶせいでるか

あ
葵のことは置いて私にあるの？」

お二 優奈の分はこれな

髪飴に渡す

一
わあ
かわいし髪飴に

「ちよつと幸也と話があるから。リリスとリーシュに起動方法との他もうもうおしえてもらつて。

頼むぞリリズム

「了解しました、マスター」

(リリスとリーシュは俺たちが転生者ということを知らないからな
言わないでおけよ)

念話で言つておぐ。

((わかつた))

葵達は訓練室に行つただろう。
扉から出ていった。

「蓮、俺だけ残つたつてことは葵達にも秘密なのかな？」

幸也が聞いてくる。あれ、ちょっと拗ねてる？

「いや別に。念話の通りややこしくなるからリリス達には聞かれた
くないだけだ」

説明しにくいもん。

転生者なんだ。って言つてもリリスなら『病院に行きますか？』と
いうだろ？。

リーシュなら罵倒され俺のレアは〇にされるのがおちだ。
俺は断じて〇ではない。

「お前、ユニゾンデバイスもらえなかつたこと拗ねてんのか？」

「ち、違えよ。別に拗ねてなんかねえし、デバイスもカートリッジ
ついてないこと、

聞きたいとも思つてねえよ」

カートリッジのことも聞いておきたかったのか。

「無印でカートリッジはまづいと思つたんだけどな。

ちなみに通常時の状態で『モード、A・S』って叫ぶとカートリッジシステムに

システムがアップグレードされるぞ、その上破損状態がかなりやばくても、

移行することで自動高速修復される。

ちなみにもとにはカートリッジシステムを取り除かないと今の状態には戻らない

「や、そうだったのか。蓮だもんのことん期待は裏切らない」

ふ、言つてくれるぜ。

おだてたつてユーナンデバイスはやらんぞ

「それでユーナンデバイスはお前には必要ないだろ」と思ったからだ。

攻撃面は言わすもがなだが、防御面でも何とかできるだろ？
そのための高機動ようのデバイスなんだから

「高機動用だと？」

「わかった。さすがだな」

「それで今まであのアルトリアをリストを使って監視したりちょっかいかけてきたわけなんだけど

まだ2回しかちょっかいかけてないが。

「ああ、あいつ『俺のものにしてやる』とか狙つてたや」

それでかあいつに見られると鳥肌が立つよつですとか言つてたが。まさか発情していたとは。さすがに引くな。

「そ、そうか。それでだなリリスとも話したんだがあいつにちよひをかけるのをやめようと呪つ

「?.?うじてだ」

「2度ほどリリスと戦つたんだが、能力に過信しそぎてるし、自分がこの世界最強とか思つてるんだろうな慢心しそぎ。ぶつちやけお前の敵にはなりえない。

真面目に修行すれば、良いとここまでいけるんだらうせどな

それでも足りない。と付け加えておく。

「やうか、フュイトの方はどうする？」

フュイトの方は考へがあるが、如何せんフレシアの位置がわからぬ
い。

「管理局が出て来る前にフレシアと会つておきたいんだが」

そつすればフレシアを助けたとしてもつかまる」とはないだり。

「リストをフュイトの方に近づけよつと呪つ」

「どれだけ強いんだ？」

「お前が投影を使わなければ、惜しいとこまで行って負けるかもな」

まだ実戦テストしたわけじゃないし。
アルトリアじゃテストにもならなかつたし俺が直々に戦つところの
もテストにならない。

「フヒトイ戦つた時に気をつけろよ

強敵だしな。

「俺が直々に戦つていつのもな。なのほの成長に影響出るだらう
から」

幸也ほのはを育てるようだ。源氏物語じゃないよ。魔法のだよ。

「それでジュエルシード何個か手土産にフレセアに接触するから原
作軽く壊れるかも」

「構わねえよもう少し壊れてるんだ。コーノが1個田で苦戦したみ
たいだからな

・・・ああ、それ・・・は

「悪い、1個持つてるんだわこれが

ジュエルシードを見せる

幸也がぎょっとしてる。

俺が原作ブレイクしちまつたよ。

「 もう驚かねえぞ

幸也は耐えているようだ。
だが無駄だ俺は知識のおかげでここ最近はありとあらゆるものを作
つていい。

楽しい楽しいぞ。

「 あ、2度と驚きたくないんだつたら第1ラボには入るなよ

あそこはもう倉庫になってしまった。
きっと驚くべきものが見れるだろう。
管理局が見たら俺を誘拐してでも技術を手に入れようとするとだろ
うな。

自信過剰じゃないよ。

（ 蓮 side out ）

（ 葵 side ）

蓮に指輪をもらつてからの記憶がない。

優奈に絶対意味が違うからと諭されたので残念だがいつか必ず。

「 葵様、優奈様。よろしくですか？」

あ、リリストが聞いてくる。
ごめんまた意識飛んでた。

「 何？あと様はやめてね、友達でしょ？」

はあ、と躊躇つてゐるようだがリーショ半もつ敬語をめてるよ。

「リーシュ。優奈様はあなたのマスターなのですよ」

「敬語禁止って言われたもん」

リーシュは素直だね。

「そういえば、デバイスもいつたんだからマスター認証するんだつけ?」

優奈がそつと髪飾りか指輪は本番のときがよかつたなあ。

「いひ、葵。飛ばない飛ばない

いけない、いけないもひ気にしないぞ。
優奈が先に始めるようだ。

「ではマスター認証、黒羽優奈。術式ミッドチルダ式。
あなたの愛称は『ソレイコ』。正式名称『ジャンティソレイコ』 セ
ットアップ」

優奈が光に包まる。

白衣の天使だね。ナース服だ。

「ふふ、バリアジャケットも完璧。次は葵だよ」

私の番か。バリアジャケットはどうしようかな

「マスター認証、日向葵。術式ミッドチルダ式
愛称は『ルナ』。正式名称『ルナリオン』。セットアップ」

私も光に包まれる。黒をイメージした服装。

スカートに肩を出すような恰好、背中には羽衣が浮いている。手袋におおわれた右手には杖が握られている。

「準備の方はできたよつですね。では訓練を始めましょう」

そつか一応魔法の訓練を受けた方がいいんだつけ？

「リーシュは葵さ」「葵」・・・葵の方をお願いします」

「はいお姉さま」

リーシュが私の先生かお手柔らかにね。

私たちの本格的な魔法の訓練が始まつた。

「葵 side out」

「アルトリア side」

目覚めると公園のベンチに横たわつていた。
なんだまた負けたのか？

「ありえねえだろ」

俺はオリ主だ。負けるはずが・・・そつか真の主人公なら負けて強くなつていくもんな。

これで俺は次元最強の称号を手に入れるんだ。なのはには悪いことしちまつたな。

あの幸也つてやつと2人つきりにしちまつたし。

さぞ不安だつただろ？、好きでもない相手と一緒にいるだなんて。
まあ明日説明すればいいか。

あの女転生者だなそりゃ『バイスの名前を『シャナ』って言つてたし。

正式名称『贊殿遮那』だな。

嘘つきやがつて次はほひほひしてやるよ

♪ アルトリア side out ♪

第9話 ～報告～（後書き）

愛称は考えるのが難しいです。

気にして頂けるとありがたいです。

アルトリアに勝利は訪れるのか？

どうも今日はあと一話くらい更新したいです。

第10話 テスタロッサ家に突撃（前書き）

どうも、友達とカラオケに行こうと思つてメールをしても帰つてきません。

1人は帰つてきたのですが、もう一人が・・・

今日思い出したんです。

あいつ、センター受けるからテスト勉強でしょうね。
僕とメール返してくれた奴A.Oで合格しちゃったからすっかりわ
れました。

これを読んでいる方にも受験者がいると思いますが、頑張つてくだ
さい。

勉強しないとまずいですよ。

ちなみに高校の成績はほぼオール3で4がちらほらな成績でした。

第10話 テスタロッサ家に突撃！

（幸也 side ）

放課後までアルトリアのやつは大人しかった。帰る間際になつて念話で話があると言われた。なのはも一緒に来ている。

アリサやすずかは今日は塾なので先に帰った。公園にてユーノと合流、人払いの結界を張る

「あなたはいつたい何者なんですか？」

ユーノはアルトリアに聞く、昨日は聞きそびれたしな。

「俺はミッドチルダの魔導師だ」

アルトリアのやつの実家はミッドチルダにあるらしい。

『ジークフリート家』古代ベルカの時代から続くお家でその道では有名らしい。

「なんでそんなやつがこの町にいるんだよ？」

「母がイギリス生まれなんだ。それで日本に仕事でな。父は次元航行艦の船長で実家にいても会えないしな。俺はこっちにいるわけだ」

戸籍も偽造されてるのか。

「それで今回の事件を知つてしまつたからな。俺にも協力させてく

れ

そういうて笑顔を見せるアルトリア。
なのはに「コボは効いていないようだ。

「いいんですか？」

ユーノは乗り気だ。まあ手伝いが増えればその分早く済むしな。
それ自体はいいんだがこいつが俺のことを快く思つてないのは知つ
ているし。

「ああ、任せてくれ、なのは（かわいいなのは？）」

「う、うん、よろしく。（寒気が）」

「それで何個か見つけたのか？」

こいつが何個か持つてているかもしれない。

「・・・」

無視かよー

「ねえ。何個持つてるの？」

「『あんなのは。まだ見つかられなくて

なのはこなみ答えるのかよ。

「じゃあ今日も探しに行くへ」ちゅつと待て・・・なんだ

いきなり止めやがって。

「あの赤髪の女はお前の仲間じゃないのか？」

リリストのことか？フェイト側に着くらしいからしらないとでも・・・

「違うな。俺の知り合いで赤い髪の女性はいない」

「つち。つかえねえな」

舌打ちのうえ使えない宣言かよ。

自分で調べるんだな。絶対見つかることはしないだろうがな。

そして日曜日になつた。今日は巨木が出てきて決意を新たにする日だ。

なのはの成長のためには必要なイベントなのだが、アルトリアがそいつを持つていやがつた。

だがなのはの決意は固まつていた。違う人が持つていたのを見たのだろう。

もし発動したらと思つてしまつたようだ。

俺もなるべくはなのはを傷つけないようにするだがスバルタを日指すつもりだ。

＼ 幸也 side out ／

＼ リリスト side ／

マスターから連絡を受けてジュエルシードが発動した場所に転移する。

そこには金髪の女の子がいた。情報通りだ。

マスターは今回の首謀者の娘が来ているかもしれないから発見次第接觸せよ、と言われている。

あちらはこちらに気づいてはいなによつだ。

「よひしいかしら？」

あちらが瞬時にこちらを向いて警戒する。

速いね。でも今の実力ならあの男にも勝てるかどうか。

「びっくりさせてしまつて」めんね。あなたのお母様に会わせたい人がいるの」

『母』の部分でぴくつとする。やはりそうなのか？

「管理局の方ですか？」

「違いますよ。私はある方の命により行動していますから
とりあえずデバイスを下げてください」

素直に下げてはもらえませんか。

「私には敵対の意はありません。デバイスも・・・ほら待機状態で
しょ？」

そういうてデバイスを足元に置く

「これで話を聞いてもらえますか？」

「わかりました、母への用件は私が聞きます。何の用ですか？」

「ううん？私の主はあなたのお母様に直接を望んでいるの。なるべくは今すぐ会いたいのです。これで合わせてはいただけませんか？」

そう言つて3つのジュエルシードを見せる。

マスターが持つていた1つと私がリーシュが見つけた2つ

「うー？それを渡してください」

「いいですが、これを渡す代わりにあなたの母様に合わせていただけますか？」

その瞬間後ろから気配が現れる。

「それをおこせええーー！」

オレンジの毛並みをしたオオカミだ。

不意打ちは見事。だが

「遅い」

左によける、その瞬間に金髪の女の子が追撃する。魔力を手にまとわせて白羽取り。かなり驚いたようですが。

「交渉は決裂ですか？」

「『』めんなさいそれは必要なものですから」

母親のためですか。

「お母様に会わせていただければ」
「これは渡しますよっ。私にも主にも
必要のないものですから」

「奪つからいー！ー！」

オレンジのオオカミは人になつて殴りかかる。
使い魔ですか障壁を張る。

「バリアブレイク！ー！」

障壁を殴りますか破れませよ。

「ばかな！？」

「単純な実力差の問題です。いい拳でしたよ

では眠つていただきましょうか。

魔力を開放し炎熱変換された魔力を彼女たちにぶつける。
やけどはしませんよ。周りの酸素を奪つだけです。

「くつー！」

「それではおやすみなさい」

後ろに短距離転移し意識を奪つ

「フヒイトー？お前えフヒイトを離せーー！」

「先に仕掛けたのはそちらでしょう」「元

私はこの子、フェイトの使い魔に言ひ。

「この子は眠つてゐるだけです。あなたはこの子のお母様の所に連れて行つてくれますか?」

主人が人質なら快く教えてくれるだろ?」

「いいよ。あんたの主人を連れてきな?」

よしでは早速マスターを呼びますか。

とつあえず私たちはフェイトのマンションへと向かった。

リリス side out リ

蓮 side out リ

リリスから連絡を受けフェイトのマンションに向かう。結界が張つてあるな。リリスが言つていたのはここか。

フードに仮面をかぶるフードには認識阻害がかけられており、こちらを調べることが一切できなくなる。

仮面はハサンの骸骨の仮面だ。怪しさ満載だが普通の人間には俺のことが一切認識できない。

「マスターいらっしゃりです」

マンションの屋上のに来たらフェイトを抱えた確かアルフにリリス

がいた。

「やあ待たせてすまない」

紳士風にいかないとな。

「「」こつがリリスの主かい？」

フロイトをせられたのだろうアルフはかなづこ立腹だ。

「リリスがすまなかつたね。でも報告によると先に仕掛けたのだろう」

アルフはこれ以上は無駄とばかりにフロイトを起しす。

「つん・・・」「」

「フロイト、めんね負けちやつて」

「いいよアルフ。あなたが主さんですか？」

「せんじや変だな・・・ゴーストとでも呼んでくれ

「本当に困る。会わせたらジゴエルシードを渡してくれるんですか？」

「ああ、あひりが何かしない限り「」あひりは手を出れない。話がしたいんだ」

フレシアにあつて話をくる。これが目的一度あひりに行けばあとで

何度も行ける。

「わかりました」

俺たちは『時の庭園』に転移した。

(座標は覚えたか?リリス)

(はい。マスターしかと)

「母さんに説明するからちょっと待って」

フュイトが進もうとするが、それを制す

「いや結構。一人で行こう」

「母さんに何をするつもりですか?」

母を愛しているんだね。大切な気持ちだ。

この子は本当に想っている。

この子の気持ちを踏みにじるのか?プレシア。

「リリスから聞いたと違うがお話をだよ」

そつこつて進んでいく。

しづらくると表情のすぐれない女性と会った。

「あなたは?」

「フュイトさんに連れてきてもらいましたよ」

「使えない子ね。こここの場所を教えるなんて」

「使えない子だと? 彼女はリリスを止めるために戦つたお前とは違う。・・・落ち着け。彼女は時間がないから焦っている。大丈夫だ。」

「あなたもほとんど動けないでしょ?」

「ピクッと反応する。」

「顔色も優れていないうですね。あまりお時間がないうだ

返事は紫の魔法。右隣に落ちていく。

「戯言は終わり。あなたのような子に構っている時間はないのよ?」

「・・・あなたの夢を叶えてあげますよ」

「・・・・・なんですか?」

「あなたの過去を知っています。管理局のサーバーにハッキングして調べさせていただきました」

俺はブレシアを救うために管理局にハッキングしデータを集めた。

「次元航行エネルギー駆動炉ヒュウドラ。あなたが開発に携わった」

この事件で事件の裏をしつた。

幸也や葵はブレシアの上司が無理難題を押し付けられ暴走。

だがこの事件はブレシアに内密に技術者を使い装置を改良とこう名

でバラし暴走。

アリシアの賠償金を払つといつてこの件から彼女を表舞台から消し、自分たちはヒュウドラを完成させ、特許を得る。

現在管理局で使われている次元航行艦の7割がヒュウドラをベースにしている。

まだこのことは幸也たちには話していないがこれを知った時にはどうするのだろうか。

なのは達が管理局に入るのをやめさせるだらう。それも俺たちの道の1つではあるのだが、この件で管理局がどう動くか。

情報によると管理局はもう動き出している。

次元航行艦アースラが地球に向かつて発進準備中との情報を得た。表向きは近くの管理外世界への巡航しかし上層部はジュエルシードの情報を入手しアースラを送つた。

「あなたの計画はなんですか？死者蘇生の秘術は見つかないとと思うよ？」

「黙りなさい！！あの事件を調べたならわかるでしょう？娘が死んだのよ。私の愛しいアリシア。まだ5歳だったのよ？」

「確かに5歳で亡くなつたのはかわいそつだ」「そりでしょ？…しかし…」

「死者を蘇らせる」とはその者に対する冒瀆だ。」

「あなたは知らないからそんなことが言えるのよ！アリシアはたつた1人、

私を励まして、ヒュウドラを開発した時、だつて疲れているのにわがままも言わないで」

「今を生きている者をなぜ大切にしない？」

「フェイトのことと言っているの？あの子は失敗作の道具、人間はないわ」

「こいつフェイトのことを人形だと？」

彼女は人だ。血も通つていて何より感情を持つている。

「大にしていた時期だつてあつたのだろ？」「

「アリシアではないとわかつた時まではね。あの子はアリシアじゃないわ！」

「そうだ！彼女はアリシアの妹だ！」

「いもう・・・と？」

「アリシアは言つたことがないのか妹が欲しいと」

幸也が言つていたアリシアとプレシアの幸せな時間の中で、アリシアが言つたそだ。

『妹が欲しい』

「フェイトの記憶を少しのぞかせてもらつたが、アリシアの記憶が残つていた。

あの子は妹が欲しいって言つていたんじやないのか？
彼女の願いを尊重はしないのか。愛娘なんだろ？」

涙が出てきた。

あれ、俺が悲しいわけじゃないのに涙ながらの力説か。笑えるな。

「アリシアの・・・願い」

「ああ、あの子の大切な願い。叶えてやらないのか?」

フレシアが泣き崩れる。

いつたいどのくらい経つただろうつか。

「あなたはどうしてアリシアのために泣いてくれるの?」

わかんねえよ

「さあな、ここで言つなら親の愛に泣いたつてどろつか、捨て子だ
しな」

せつ。とフレシアは頭を伏せる。

「フロイト señor いるんでしょう? 入つてからしゃい?」

フロイトとアルフ、リリスが入つてくる。

「母をさせつたの・・・」

「うわさひこりゃー」

フレシアが手招きする。その行動にフロイトは困惑っていたが、

リストに背中を軽く押される。

フロイトがフレシアに近づくと優しく抱きしめた。

「あ・・・」

「『みんなさいね、フュイト。私はだめな母親だわ。娘を失つたショックでその妹にその影を求めて、違つたから見捨てようとして。』

あなたは私の娘なのにね。」

「か・あ・・・さん」

「なあに、フュイト？」

「母さん、母さん、母さん！」

「なあに、フュイト？」

「う、うわーん」

フュイトは泣き出してしまつた。
隣でアルフが泣いている。

「よかつたね、よかつたね。フュイト」

そんなアルフにハンカチを渡す
おい、鼻はかむなよ。

あとはアリシアの蘇生か・・・何とかできつかなあ?

第10話 テスター・サ家に突撃（後書き）

蓮の能力のチート性が明らかに。

次回もよろしく。

第1-1話 テスタロッサ家の²

「蓮 side 」

「・・・アリシアを蘇生するつて？」

「ああ」

爆弾落としてみた。

ハトが豆鉄砲喰らつたかを顔をしてる。
俺たちはアリシアのポッドの前に来ている。
アリシアを火葬しようという話だつたのだが。

「あなたさつき『死者を蘇らせる』ことその者に対する冒瀆だ』つて言つてたじやない」

「それがどうした？」

確かに言つたが。

「なら「ああ言つはしたが、僕はアリシアの」となんてよく知らな
い」「・・・」

唚然としてる。まあそうだろ。他人にするなと言つておいて自分はするといつのだから。

「僕はねプレシア。あなたの案がフェイドを不幸にすると思つてや
めさせよつとしたんだよ」

原素ではフュイト一人を残し虚数空間に落下していく。それは彼女の心に大きな爪痕を残すだろう。

「蘇生する方法に当てがある。だが僕の魔力量では成功しない。君が海鳴市にジュエルシードをばら撒いたのだから責任を持つて回収してほしい」

フレシアのまいた種だ少しばかりおいつ。

「わうね。」「でも・・・まだ何か要求するの?」

「あなたは病氣だ。フュイトが手伝ってくれるとありがたい」

フュイトの方を見る。

「母さん病氣つて・・・」

「『めんなさい、フュイトもつあまり長くないの?』

「そんな・・・アリシア姉さんが戻ってくるかもしねないのに

あ、また泣きそうだ。

「私の体には病氣がいたるといひに転位している。もう食事もでき
ないぐらいに」

「それも当てがある

優奈に説明すればすぐに治るだろう。

「安心しり一瞬で治る、善は急げだな」

「私の体は魔法では治らない程よ？あなたでは無理じゃないの？」

「僕には無理だが知り合いにね、回復だけなら神掛かつた能力者がいるから」

「正体をばらすわけにはいかないからな。一回戻るか。

「少し待っててくれ。連れてくる」

「いいの？」

「寝てたら起こしてくれるしね。死にかけてるつていえばすぐに来るだろう」

「ありがとうね何から何まで」

「いいや、あなたがジュエルシードを落としてくれたことで研究もできだし」

「…あなたジュエルシードの解析もできるところの？」

「ああ、少し時間はかかるだけだが」

「天才なのかしら？」

「好きなことに熱中しているだけだ」

「そう言って転移する。」

「ありがとう」

フェイトが礼をこころが。

「まだ何も解決していないだろ?」

場所は海鳴市上空、自宅の真上。転位はちゃんと成功したようだ。

急いで優奈を探す。この孤児院はだいぶフリーダムになった。院長先生がしばらく海外に旅行に出かけている。昔にこっこを出た先輩が誘つたらしい。

「優奈? ビーだ?」

この時間は眠ってるかもな?

「あ、蓮!」

葵が出てきた。

風呂上りなのかやや頬が赤い。

「葵か、優奈はどうだ?」

「優奈は研究室に入つて修行してゐるよ?」

サンキューなど言って研究室に向かう

研究室の訓練室では優奈がリーシュと訓練しているようだった。

「優奈ちよつとこいか?」

「何？どしたの？」

「治してもらいたい人がいる。ヤバめなんだ」

優奈の目が見開かれる。

「今すぐ行こう。患者はどこにいるの」

葵もただことではないとと思ったのか後ろについてきていた。

「時の庭園」

「え？」

2人ともハモるところだったか今の？

「時の庭園つて」

葵が確認していく。

「プレシアを治療してほしい」

何があつたかを説明する。

「というわけで善は急げだ、今すぐ行くぞ」

優奈を連れて研究室を出る。そして転移。

葵もついてきた2人はローブを着て仮面をかぶる。

「プレシア達の前では『『ペースト』』って乗ってるから。本名、言うなよ？」

一応確認は取つておく。

「わかったわ」

「戻つたぞプレシア

フレシア達の所に急ぐ

「は、早かつたわね。まだ5分も経つてないわよ？後ろの子たちが？」

「そうだ。1人は何となくついてきただけだがな」

「何よ。『『ペースト』』は何も言わなかつたじゃない

「プレシアを治療するつて言つたる？お前は治療系じやないだろ？」

「そつやそつだナビ、とふさへなる。

「あなたも『『ペースト』』さんのお友達なんですか？」

「うそうそだね。昔からの友達だよ」

「ま、そういう話はあとでできる。まずは治療な

「わかった。じゃあプレシアさんここで座つてくれださー

フレシアを座らせその前に優奈がしゃがむ。

「では、『彼女を癒して、病魔を消して。』」

優奈が祈るようなポーズをすると2言いつ。

こういう言葉に表すことでイメージが定まるらしい。

「どうですか？体が軽くなりませんでしたか？」

「え、ええ不思議な感覚。今なら食欲も湧くわ」

「大丈夫じゃないですか？」ゴーストは彼女の様子がわかります

「ああ、さっきまで巣くっていた病巣がすべて消えている」

ちょっととしたゴーグルで見る、試作品『スカウター』

これは見た相手の健康状態、戦闘力を測ることができます。

「治ったの？」

「うん、体力まではまだ戻らないだろうけどちゃんと食べていれば元通りですよ」

「あなたの力でアリシアは？」

優奈の力ではできない彼女のは癒すためのものだから。

「私は治療しかできません。人を蘇らせるなんてとても」

「安心しろフレシア僕は約束を守るよ」

「ええ、信用しているわ」

さて、これからのことだな。

「フレシアがジュノルシードをばら撒いたことで発掘者が出向いて回収してる。それで現地で魔導師になつてしまつた少女と現地にいた魔導師と協力してジュノルシードを集めている。

フェイトは現地の魔導師と合流してフレシアのもとに連れてく
れ

「わかった

「私は何をすればいいの？」

フレシアが聞いてくる。

お前が出向いてユーノに謝ればいいんだけど。

「あなたはフェイトを褒めろ」

「え？」

「フェイトに冷たく当たつっていたのだろう？」

「だったら今から褒めろ」

「か、母さん。あの、頑張るね」

あ、フェイトの目が輝いてる。

「わ、わかったはフロイト…………期待してるわ」

「うん……」

いい笑顔だな。

「ありがとうゴーストさん。あなたのおかげで母さんとじもつと仲良くなれたよ」

「そ、そりが。どういたしまして?」

・・・悪い幸也。フロイトへのフラグ思いつきり折ったかも。

（蓮 side out）

第1-2話 ～ネコガミサマ～（前書き）

あのアニメのネコやっぱくないですか。
ドストライクでしたよ。

第1-2話 ソネコガミサマ～

（幸也 side ）

「すまなかつた」

俺の目の前には土下座をした蓮がいる。
まるで一次小説プロローグの神様みたいだ。

「どうしたんだ急に？とりあえず顔をあげるよ」

「実は・・・」

蓮は今日フュイトの家に行つてやらかしたことの説明した。

「そつかブレシアはむづフュイトに虐待しないのか。で、どうして
あやまるんだ？」

「治療してアリシアを蘇生するつて約束したんだけど・・・フュイ
トに尊敬の眼差しで見られてるんだ」

は？尊敬なら別にいいだろ？
葵も会話に入つてくる。

「残念ながらあれはもう恋する乙女の顔だったね」

な・・んだ・と

「やつだねあれはそつこつ顔だった。

優奈も同意する。

そんな俺のハーレムが・・・

「本当に、すまなかつたと、思つてゐる」

まあ反省していろいろいんだが。

ハーレムの道は長いな。

いや、ほんとに今からなのは一択でもと思つんだがあの野郎にすずかもアリサも毒牙にかけられると想つて怒りがわいてくる。

「まあ、偽名だし仮面で素顔隠したし、認識阻害のロープも来てたし。

アルフが日常で俺に『氣づく』ことないな。誰かがばらさなければ」

蓮はそつとがフュイトがいるのまま蓮を好きになってくれたら、葵が、でもフュイトにも幸せになつてしましいし、葵は幼馴染だし。

「そ、それでこれからどうするんだ？」

蓮に聞いておくことこのおかげでフュイトの暗い記憶はなくなりそうだ。

あとはジユエルシードをすべて揃え・・・。

あれ・・・なのまとフュイトの友達フラグ折つてね？

「ああ、フュイトはなのは達で合流させて一緒にジユエルシードを集めてもいいことにした。」

そつか、これで友達になるわけだ。でもそれだとなのは強化フラグ

が結構折れてるんじや？

「まあ今回の事件についてどうして起こったのかユーノへ説明されるしな」

「管理局はどうなってる？」

「ユーノが事前に管理局に報告していたのかも知れないが動きが早いぞ。

そろそろ出張つて来るかもな。」

イレギュラーがなければ万事オッケーでか用意周到だな。さすがだ。

「明日はすずかの家に行く」

そう、原作だとフェイトが現れる日。今回は味方だがな。

「フェイトはリリスと行動している。なのはに攻撃を仕掛けることはないだろう」

リリスも一緒かあのバカが攻撃を仕掛けそうだな

「で、アリシアの蘇生なんだが・・・ジュエルシードの魔力を使う

「！？大丈夫か？大魔導師であるプレシアでも制御が難しそうだつたんだぞ」

「ジュエルシードは解析したうまく扱える」

蓮は真剣だ。この状態の蓮はとにかく嘘を吐かない。できること

は言わない。

「任せせるぜ親友」

その言葉に田を丸くする。ここでのこの顔は久しぶりだな。

「ああ、任せろ親友」

互いに拳をぶつける。

「男つて……」

葵が呆れている。

「今日は騒べせ。宴だ！！」

「優奈がもう寝てるんだ。明日な

テンションが低い。俺をもてあそんだな？

「 幸也 side out 」

「 フェイト side 」

私はアルフとリリスさんと共にジュエルシードの気配を追つて森の中に入っていた。

「ゴーストさんは来ていない。・・・会いたいなあ。リリスさんに聞いてみる。

「あのリリスさん。ゴーストさんは来ないんですか？」

「ええ。主は忙しいようですね。研究室に入り浸つております」

「ゴーストさんは来ないのか。

「フロイトまた会えるよ、安心して?」

アルフもいつ言ってくれるし大丈夫だよね。

「一、ジュエルシーの反応を確認」

リリスさんが突然告げる。発動してしまった。
確かに魔力反応がする。一結界が張られた。
あれはネコさんなのかな?子猫がそのままおっきくなつたよつだ。

「／＼＼＼　かわいい」

「リリスさん?」

「はっ!私は何を」

かわいいものが好きなんだね。

「フロイトちゃん、あの白い服の子が民間協力者で肩に乗つている
のが例の被害者」

そうかあの動物が母さんが迷惑をかけてしまつた。
あとでちやんと謝らないと。

「それであの銀色のコートの子が現地にいた魔導師。話しかけてお

いで

リリスさんは後ろを向く

「どうしたんですか？」

「ちょっと熱烈な視線がですね。追っかけの方が近くにいるようなので注意してきます」

そう言つて机に向かう

「フロイト。まずはあの子たちに合流しないと」

そうだねあとで聞けばいいか。

それにしてもストーカー？ だつたかな母さんが気を付けなさいって言つてたんだよね。

危ない人だつて母さんを治療してくれた人も言つてた。

「よし行くわ、アルフ」

私はアルフとネコさんの下へと向かう。

フロイト side out

なのは side

今日はすずかちゃんのお家にお呼ばれされたんだけジジュエルシードが発動してしまつて。

今日は幸也君だけ、アルトリア君は呼ばれなかつたの。でも、今日は特訓の成果を見せるチャンス。

「幸也君。 今日せひとつやうせん」

幸也君はオーケーしてくれた。
よし行くよ。 でも

「・・・ネコさん?」

ジユノルシードは願いを叶える。

子猫の願いであるおつきになりたいといつものが今の状況になってしまったのでは。

とコーン君が説明してくれたが、これはちよつと

「大きくなりすぎかも・・・」

「ああこんななりでじゅれつかれたらと思つて」

ふちご。

「こやわつといふちゅんだな。 ざかひしててもコーン君未来はないな

「ちよつとー?」

「見てみりあのネコお前の」と見じる

「え?」

コーン君があの猫をよく見ると・・・確かに見てる。すうじい見て
るの。

「ど、とつあえずなのさ。封印しよう」

「や、そうだね」

私が覚えたのはアクセルシューターといつ射撃魔法まだ命中率は低いけどある大きさなら。

「行くよー！ シュートー！」

3つの球体がネコさんに向かう。
全弾命中このまま一気に封印。

「なのはー」

ネコさんは跳んだ。あの大きさなのに早いやられちゃう。
潰されちゃう直前黄色い光が飛んできてネコさんにあたる。え?
幸也君じゃないみたい、ならだれが?

そこには黒衣のマントを着た。金髪の女の子がいた。

「なのは side out 」

「 幸也 side 」

フェイトが現れた途中から気づいたので今のピンチをフェイトに任せたのだが。

これでなのはとフェイトが友達になつてくれると思うがたい。

「あなたは?」

なのはがフュイトに聞くが、フュイトはそれには答えなかつた。

「血印紹介はあとで、今はジュエルシードの封印を」

「う、うん」

そうだなあの猫は脅威だ。意外と速いな。
かわいい外見で敵を惑わす。

それはなのはもフュイトもか？

そのあとはあつけなかつた。

アルフとコーノでネコを動けなくし、なのはとフュイトの砲撃で沈
める。

「あなたは？」「なのは一回戻るぞ。アリサ達が待つてゐる」え？でも・
・

「大丈夫だよこの公園に来て。テバイスに地図を送るから」

フュイトは行つてしまつた。

「ほら、なのは。早く戻らないと心配してゐるぞ？」

「そうだね」

また会えるからさ。

しかしアルトリアの奴来なかつたな。

呼ばれなくてもジューエルシードが発動したら飛んでくるだらう」と
まあいいかいなきやいないで。

俺たちは屋敷へと戻つて行つた。

}

幸也

s
i
d
e

o
u
t

}

第1-2話 ネコガマサ（後書き）

フロイト・・・じつじつけ

やらかしちゃったな。

『反省はしてる。後悔はない』とは言えないんだよ。
半々みたいな

そういうえばネタは基本的にいい覚えです。

第13話 ～協力～

～ 幸也 side ～

すずかの家を出てフェイトにもらった地図を頼りに公園に向かう。そこにはフェイトとアルフ、リリスがいた。

「まずは自己紹介だな。俺は井口幸也だ。こつちは・・・」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

フェイトの側も自己紹介する。

「フェイト・テスタークッサです。こつちはアルフ」

「私はリリスです」

さて、何から話そつか。

「管理局の魔導師なんですか？」

ユーノが切り出す。

「いえ。私たちは管理局の魔導師ではありません。ついて来てほしいところがあるのです」

リリストはやつこつと転移を始めよひとする。

「ハレですと無料なお客様が出てきそうですか」

リリストは遠くを見つめる。・・・なんだ?何かあるのか?
はるか遠くの屋根に見知った・・・アルトリアが寝ていた。
なのは達はわかつていよいよだ。

「では転移します。よろしいですか?」

その言葉に誰も意義を唱えない。俺たちは転移する。
・・・ハレが時の庭園か。

「ついて来てください」

フロイトがみんなを誘導する。
しばらく歩くと開けた場所に出た。

「母さんお連れしました」

そこにはいたのは原作の鬼婆ではなくて優しい顔をした女性だった。

「あの、あなたは?」

「私はフレシア・テスタークサ。フロイトの母親よ」

ゴーノは少なくとも名前を知っているようだ。

「フロイトちゃんのお母さんですか?どういった用件なのでしょうか?」

「謝罪をしようと思つて」

なのはもユーノも疑問符が頭に出てる。
そりやそりやあつて間もない人に謝られるなんて。

「私がジュエルシードの輸送船に攻撃した犯人だからよ」

「なんだつて！？」

「ユーノ君だつたかしら。『めんなさいね、ある目的のためにジュエルシードの力が必要だつたのよ』

「なら直接来ればよかつたじゃないんですか？」

なのははプレシアのことを見らないからな。

「それは・・・私はミッドチルダを追放された魔導師なの。
だから管理局は私にはロストロギアなんて貸してはくれないわ」

「追放・・・ですか？」

フレシアは自分の事故のことを話した。
ジュエルシードの使い道を。

「そんな死者蘇生だなんて・・・」

「無理かもしけないけどアルハザードにいけば秘術があるはずよ。
その秘術を使えばアリシアの蘇生も」

「アルハザードはおとぎ話をとも言われていました。そのためにジュエルシードを使つとこいつのですか？」

「ええ、やつよ」

「どうして僕たちを呼んだんですか？」

ユーノも思ったことだらう。

相手は大魔導師だ。それにフェイトならなのはにも勝てる。リリスならアルトリアや俺を止められるほどの実力者だ。ジュエルシードを奪つつもりなら簡単にできる。

「他のプランができたのよ」

「死者蘇生がアルハザード以外にもあるとこいつのですか？」

「ええ」

そういつてフレシアはリリスに促す。

「私の主はほかのプランを提示しフレシアに勧めました。そのためにはジュエルシードの魔力が必要なのです」

「リリスさんはフレシアさんの仲間ではないんですか？」

「仲間とも言えますが、主がフレシアの助けになれといったからですね」

「協力しているだけだと？」

「後ろの男の子とあのアルトリア2人同時に相手できるみたいなことがうですか？」

リリス、遠回しに俺とアルトリア2人同時に相手できるみたいないと言つてないか？

「それで僕にどうしようと？」

ユーノはまだ信頼しかねているようだ。

相手は大魔導師。だがミッドチルダを追放された犯罪者。ほしいの。

「リリスの主の大規模魔術の発動のためにジュエルシードを貸して終われば返すし、出るとこりで出すわ」

「母さん！？」

フェイトは驚いている。血首するつもりなのかフレシア。

「『めんなさい』フェイトやはり迷惑を掛けてしまったのだから償いはきちんとするわ」

「でも姉さんや私は・・・」

「彼なら快く引き受けてくれるは『引き受けるわけないだらつ』ゴースト！」

「ゴーストと呼ばれる男が俺たちの後ろにいた。いつの間に！」

「そんなことじゅフェイトが可哀想だらう？何のために僕がいると

思つてゐるんだ?」

「あなたがリリスさんの主ですか?」

ユーノは警戒度マックスだ。

「ああ、ユーノ・スクライア君。初めまして」

きれいにお辞儀する。ここにこんなキャラで通すのか?

「あなたは死者を蘇らせるプランがあるといつ話でしたがどうするつもりですか?」

ユーノが聞きたいのは方法。俺だつて知りたい。

「君は世界がどれだけ広く常識では測れないことがそいつくんに落ちているか知つていいか?」

突然そんなことを言ひ。

「いえ、広いのはわかりますが死者蘇生なんて」

「ならまだ管理局が行つたことのない世界だつてあるんだ。死者蘇生はできる

そういうて手に魔力を人差し指に集める。

ユーノは攻撃かと思い身構える。

「たとえば私は管理局の知らない魔法を扱う」とができる

そういうつて空中に文字を書いていく。
あれこれって・・・ランサーの。

「これはこの地球に昔あったとされる技術と僕の知識が合わせて
できた。ルーン魔術だ」

ルーン文字で何かを書く。すると空中に火が生まれた。
蓮お前こんなこともできるのかよ。

「！？確かにそのような魔法は見たことがありません。管理局に報
告はしないのですか？」

「なぜだね？」

「管理局に申請をしないといけないのがルールですよ」

「管理局を信用していないのだから無理だね」

「なぜですか？」

そつかユーノは管理局の裏を知らないんだつけな。
蓮は知っているということか。

「管理局はプレシアを貶めた。彼女を利用して、追放しあげくには違
法魔導師のレッテルだ」

そんなやつらの『ローロ』の管理局には入りたくないだろう？と続
ける。

「お願い力を貸して」

プレシアがユーノに頭を下げる。

「ユーノいいんじゃないか？誰も損はしないだらうへ。」

ユーノに行つてはみるが管理局がロストロギアを利用すると聞けば黙つてはいなだらう。

最悪なのはもユーノも犯罪者扱いされるかもな。

「ユーノ君私からもお願ひ。できるこじならプレシアちゃんの助けになりたいの」

「なのは・・・。わかりました幸い管理局もまだ来ていないようですし」

「それでプレシアを許してほしい。彼女は良くも悪くも娘のためだつたんだ」

「・・・・・そうですね怪我したのは僕だけですし、ジュエルシードが落下したのは

事故かも知れないとこつことだから。協力します。」

「せうか。よかつたダメだと言つたら力づくで奪つといふだつた。」

蓮の力づくか、寒氣が出るな。

「ジュエルシードは何個使つますか？」

「15個で行けるだらう」

「うわ、4つもいるんだ？」

「うちは5つだ」

9個まだ足りないな

「では探しに行こつか。僕は研究室に戻る」

ゴーストはこのまま転移した。
まあこれからが大変だ。

幸也 side out

なのは side

私と同じ歳の魔導師フェイトちゃん。

「ねえフェイトちゃん。私も友達になりたいんだ」

「え? どうしたら友達になれるの?」

「簡単だよ。・・・名前を呼んで」

初めはそれだけでいいんだよ。田を見て名前を呼ぶだけでいいんだよ

「私、高町なのは」

「私は、フェイト・テスターッサ」

「よろしくねフェイトちゃん!」

「まことにあなたは優しくなのは」

「私たちにお友達になりました。
アルフさんが泣いている。ビーフしたんだね」
感動する場面かな？

「あんたんどこのセイはにこ子だね」

「なのはは優しいからな、これからは仲間か」

「僕もあんな子とは戦いたくありません」

「ゴーの君たちとはゴーの君たちで話しあつてゐる

「それでねフロイドちゃん私に魔法の使い方を教えて欲しいの」

「え、でも私はあまり強くないよ」

「そんなことないよ」

「だつたひ母さんと聞いてみるね」

「うそ」

「の日からフロイドちゃんと修行が開始されるのです。

「なのは side out」

「幸也 side」

なのはとフュイトのイベントは無事に終了した。

最終回じゃないよ。でもいいのか？

といふかなぜアルフは泣いている。

「フュイトのことをさクローンだと知つても友達になりたいって言つてくれるんだよ」

いい子だよ。と言つてまた泣き始める。

フレシアが事件の始まりの理由を説明した時に全部を話していたんだが、それでもなのはフュイトに友達になりたいって言つてあげれるんだもんな。

「クローンだからつて関係ない。フュイトはフュイトなんだらう？」

俺もそう思つている。

俺たちは現在海鳴市に戻つてている。

時間は夜ジュエルシードの反応があつたからだ。

「やつちへ行つたよなのは」

ユーノとアルフのバックアップでなのはとフュイトを援護する。

封印が完了してその場にどぎまつた時事件は起きたリリスに向かつて赤い光が向かってきた。

リリスが紙一重でよけるがダメだ。そいつは『フルンティング赤原獵犬』だ。リリスを貫くために戻つてくる。あいつはどこに？

「アルトリアやめる。こいつは味方だ」

『幸也やつぱり知つてたんだな？おまえこいつとグルだつたんだろ』

「アルトリア君？やめてリリスさんは仲間になつたんだよ」

『こいつは今まで俺をコケにしたんだ償いをさせてやる』

アルトリアの『赤原獵犬』がリリスに迫る。

リリスもよけられないことが分かつたのか迎え撃つつもりだ。

「『断罪・一閃』！」

リリスの攻撃を『赤原獵犬』が貫く

「！？」

『残念だつたな貫通力は『ゲイ・ボルク』ほどだ

あいつそんな能力を。

（俺は衛宮の投影が使えるが神に能力を高めてもらつてるんだ。
宝具の合成なんて朝飯前よ。2つだけだけどな）

リリスはデバイスで止めるが。

『デバイスなんて足止めにもならねえぜ！』

最初は小さな亀裂だが徐々に大きくなりそして

キィーン不思議な音とともに砕ける。

『泣いて詫びる……』

リリスはデバイスを失った瞬間転移するがそれを執拗に追いかける矢。

「やめろ……」

おれは矢を叩き落とそうとするが、・・・速い俺でも赤い閃光に見える。

目を凝らすと何とか見える。

リリスの転移は確かに速い。だが矢は執拗に狙つてくる。

「女性の胸のを狙つとは、とんだ変態なのですね？」

心臓を狙う『ゲイ・ボルグ』の特性。

「アルトリア君やめて……」ことしたつて何にもならない

『だめだ一回は一回だる』

クソ！駄目なのか？助けられないのか

「ここまでのようですね」

あきらめたようなリリスの声が聞こえる。

転位をやめたリリスを貫こうとした矢が
突如消え失せた。不快音とともに。

「やれやれ、気になつてみてみればこれが」

そこにはフードに髑髏の仮面をかぶつた、蓮がいた。

「 幸也 side out 」

第13話 ～協力～（後書き）

なのはとフロイトの友達になる会話こんな感じになりましたが
今後の展開でもっと友情を深めるつもりです。

きっかけですので

第14話 ～蓮vsアルトリア～

（蓮 side ）

「おい、隠れてないで出てきたらどうだい臆病者」

俺は挑発しながらアルトリアを呼び出す。

俺は切れていた。そして自分にも怒りをぶつけていた。
ここまでだとは思ってなかつたな。

アルトリアの執念深さを読み違えた。

読みが外れるなんて何年ぶりだ？いやフェイトの時から外れてるか。

『どうせって俺の宝具を・・・』

「知りたかったら出てきたらどうだい？わかるかもね

口調が崩れそうだ。

「抜かせ！！」

その瞬間あたりの風景が変わる。

あたりを見渡すと剣、剣、剣、剣・・・・・・・・
固有結界か・・・面倒だな。

「なにこれ？」

なのは達は驚いている。

「驚いたかなのは。これは俺の心象風景。これは俺の世界だ」

何が俺の世界だ。所詮はコピー限りなく本物に近い偽物。ギルガメシュが偽物を嫌うのもわかるな。

これは衛宮の世界お前程度じゃ見ることのできない。戦場。俺は Fate はゲームもマンガもアニメも全部やったがここまで似ていると感心する。

「『』の世界の武器はすべて俺が扱える。『』の武器たちはすべて俺のものだ」

「『』たくはいにさつとかかって『』」

「行くぞ一撃で死ぬなよ? ゲイ・ボルグウ! ! !」

アルトリアは有名なあの槍を投げつける。

俺はガントレットに包まれた左手をやりに向ける。

「無駄だ」

槍が手の平に当たる瞬間に不快音が鳴り響く。槍はそこになかつたかのように消え失せた。

「ば、馬鹿な! ?」

「さつきも『』れで消したのだがな。君程度の実力ではこんなもんか

ガントレット型の魔装具『幻想殺し』。

ネックレス型と違つて上条のように武器として使用可能になつてい
る。

俺の能力といふか神からもらつた知識のおかげでイマジンブレイカーの原理が理解できた。

俺の知識は部屋にあつたマンガやライトノベルだけのはずだつたが、気を利かせてなのがゲームや映画の知識まで入つていて。知識はあるが経験がない。不思議なよつだが俺の部屋には『るわつに剣心』があつた。

飛天御剣流は習得してないが習得方法はわかるというのだ。何をどのようにすれば習得できるか頭に叩き込まれている。型が頭の中にあるのにその型を覚えるのに時間がかかる。まあ鍛えることは好きだから別にいいけど。

道具作成のスキルがあつたのか結構わけのわからないものできた。そのうちの一品がこれ。

まさかできるとは思つていなかつた。

だつてこれ魔装具なんだぜ？矛盾しているだろ？

アルトリアはギルガメシュのように空中に大量に武器を投影して射出してくる。

が、こいつはイマジンブレイカーであつてそつではない。

魔法を打ち消す範囲が任意で決められる。自分を守るように展開させる。

迫りくる伝説の武器たちファイールドですべてなかつたよつて消えていく。

「そんな！？だ、だつたら『ガイ・ジャルグ破魔の紅薔薇』－！」

魔法を打ち消すやつか。だがそれも無駄。

ゲイジヤルグの処理能力とこちらの処理能力では断然こちらが上。

「ゲイジヤルグまで？クソ、オリ主の俺は負けねえんだよ。出番だ

「エア」

幸也は何かわかるようだ。

「あいつ乖離剣を使う気か？なのはフェイトこいつに来い」

幸也がなのは達を自分の後ろに集め盾を投影する。

アヴァロンか？それなら止められるかもな？

「『『天地乖離す！』』

魔力が剣に充填され。

真名解放か・・・ならば！

「来い、リリス」

「はい、マスター」

「『『ユニゾン・イン』』

俺とリリスはユニゾンして迎え撃つ。

一瞬あいつは驚いたようだがすぐに魔力をさらに込める。

こんな美人が他人の女だつたからさらに切れたかな？

「『『開闢の星』』！…！」

「『『幻想殺し』』！…！」

こちらも宝具のように真名を叫ぶ。

こいつは意思があるかのように真名解放することによってその力を

拡大する。

対界宝具である」二つの一撃を焼き消していく。

均衡は一瞬、対界宝具だが勝負はすでに見えていた。

心象風景なためか大地には変わった様子はない。だが煙が充満している。

「は、はは消し飛んだが」

「馬鹿野郎危ねえだらうー。」

よかつた幸也たちは無事なようだな。
速く、煙晴れないかな？

「これで邪魔者はいなくなつた。なのは、その子は誰なんだ？」

あれ？俺消し飛んだことになつてる？確認もしていないのに？
よほど乖離剣に自信があつたのか？

疑問がわくがそんなことはどうでもいい。

「誰が消し飛んだって？」

誰もそんなこと言つてないが空氣がそれっぽい。
やべ悪役みたいな声でた。

俺は無傷な状態で煙の外に出ていく。

（蓮 side out）

幸也 side

俺はアヴァロンを7つも投影して乖離剣の攻撃を防いだ。
蓮がない。

「馬鹿野郎危ねえだらうー。」

危くなのはたちも巻き込まれるといひだつたんだぞー。

「これで邪魔者はいなくなつた。なのは、その子は誰なんだ?」

「この状況でそんなこと聞いてくるのか?
フェイトがめっちゃお前のこと睨んでるぞ。」

「誰が消し飛んだって?」

悪魔の声が響く。

いや正確には悪魔ではないが。

「ハーストー!」

フェイト大喜びだ。ちょっと悲しい。

俺のハーレムの一員の予定だつたのに。

あ、アルトリアのやつ『馬鹿な!』って顔してゐる。

幸也 side out

アルトリア side

乖離剣の真明解放は最強だ。

エクスカリバーのおかげで威力に削られ、十分な威力を發揮できていないうことがあったが。

あいつは煙で見えないが消し飛んだろう。

あの赤髪の女にはわるいことしちまたな。

ユニゾンデバイスだったとはついイラつとしちまたて魔力をそらじに上乗せしちまたな。

いかに魔力がEXランクとはいえかなり持つていかれた。

「馬鹿野郎危ねえだろ？！」

雑魚の分際で俺を馬鹿呼ばわりだと？

本来ならこの後はお前だがなのはとフェイトを守つたからなまたの機会にしてやるか。

「これで邪魔者はいなくなつた。なのは、その子は誰なんだ？」

フェイトのことは知つてゐるがあえて聞いておく。

原作と違つてゐるようだからな確認しないと。

ん？睨んでいるようだが。ああ、俺の魔力に当てられて驚いてしまつたか。

これで俺の真の強さをしつてなのはも俺のことを惚れ直すだろ？

「誰が消し飛んだって？」

「ゴースト！…」

ば、ばかな、あ、ありえん。

おれの魔力をほとんど持つていった真名解放の乖離剣を。

}

アルトリア

s
i
d
e

o
u
t

}

第14話 ～蓮vsアーチー（後書き）

アルトリアのハーレムの終着点は『俺にて死んで』ですが、幸せの終着点は『俺の愛した子が幸せで』です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887ba/>

転生して目指すはサポート役

2012年1月14日21時46分発行